

アダム・スミスの価値論

永谷 清

目 次

- はじめに
- I スミスにとっての価値形成過程
- 1 通説（投下労働・支配労働価値説の並存）への疑問
 - 2 マルクスのスミス批判の限度
 - 3 スミスの労働価値説
 - 4 小林昇氏の「商業社会」説
 - 5 羽鳥卓也氏の反論と問題点
- 補論 ドップとミークの見解
- II スミスにとっての労働生産過程
- 1 「社会の初期未開の状態」
 - 2 「初期未開の状態」の他の一面
 - 3 揚武雄氏の批判
 - 4 時永説の検討
 - 5 鎌倉説の検討 (以上 本稿)
- III スミスにとっての価値増殖過程

はじめに

これまでスミスの価値論について日本で書かれた論文は、数百はあるだろうし、世界では数千に達しているに違いない。しかし今なを十分に解明されたとは言えないようである。価値論は『国富論』全体を貫く基礎理論であるが、広くとれば全5編中の最初の2編、もっとも狭くとれば第1編の第5章と第6章のうちの数10頁にすぎない。にもかかわらずこれまでこのような多数な解釈がなされてきたことは、その魅力と難解さを示している。

それがたんなる、投下労働価値説(リカード)、支配労働価値説(マルサス)、労働=ニューメール説(シュムペーター)、労働負効用説(スキナー)、というのであれば、それなりに単純明快であり、これほど論じられ続けることはなかったであろう。アダム・スミスは、今日までこ

の200年余りにわたる解釈の混乱をまるで予見していたかのように、自己の価値論について「明確を期するためにあらんかぎりの苦心をしたところで、それ自体の性質がはなはだしく抽象的な問題については、なおある程度のあいまいさが残る」とのべ、読者に「不必要に冗漫と思われるおそれのある詳論を検討するための忍耐と、わたしができるかぎり十分な説明をしたところで、おそらくはなおそのあとにのこるいく分かあいまいに思われることを理解するための注意とを、衷心懇請」〔4章末尾〔1〕①148頁, p. 46) している。

このスミスの注意は、マルクスが『資本論』冒頭の価値論について序文で、難解さを読者に注意したのを思い出させる。スミス価値論の理解には、マルクスの価値形態論の研究に必要となるよう綿密さを要求されると覚悟せねばならないだろう。実際、両者の価値論は研究論文の多さという点で、双壁をなしている。それは、両者の経済学原理論形成史上に占める画期的偉業——資本主義の形成期と典型的完成期とのそれ——によるのであって、偶然ではない。しかも、後者の価値論は、前者の詳細な批判をとおして形成されている。

これまでのスミス価値論の理解にもっとも大きな影響を与えたのは、いうまでもなくマルクスの『剰余価値学説史』であった。しかし戦後の日本のスミス研究は、高島善哉氏の言によれば、同書を「先輩の諸学説がすべて自分の剰余価値理論を作り上げるための素材として触媒として利用されているにすぎない」〔(8)231頁〕と解し、同書にもとづく研究を「スミスの経済理論をただマルクスの眼をもって裁断しようとする超越的なスミス解釈」〔(9)137頁〕と批判す

ることから出発したといつてよい。この気運は『国富論』全体の経済思想史あるいは経済史的研究を、とくに市民社会論として進展させることになった。そして高島氏や内田義彦氏の研究は、これらの成果をもとにして、『剰余価値学説史』にもとづく「超越的批判」と「内在的研究」との統一ないしは後者による前者の止揚をめざしたものとつてよいだろう。

内田義彦氏は「古典経済学の研究を経済学(=価値論)ぬきの歴史あるいは思想史研究に解消してしまってもならぬし、また歴史の科学という観点ぬきの価値論イジリにしてもならぬ」と述べ、「経済学が真実の意味において歴史分析の武器になるかどうかは、まさしく価値論にかかっている」(〔11〕14頁)、とさえ言っている。しかし『経済学の生誕』後編でのスミス価値論研究は、『剰余価値学説史』のスミス研究を超えるとはいえないだけでなく、ときには氏が拒否した「超然的批判」に自から陥っているように見える。内在的研究をめざした前編と後編とが、これまで何度か指摘されているように、うまく接合しているとはいえない。高島氏の価値論研究も、後に示すように同様の結果になっていると思われる。

『剰余価値学説史』や『資本論』の原理論研究上における位置は画期的であり、マルクスのスミス批判をスミス価値論の研究の出発点とすることは現在もおお正しいのであるが、そこに留まるかぎり、投下労働価値説と支配労働価値説、あるいは価値分解説と価値構成説、という明かに矛盾し両立しえないこの二つの概念を、なぜ、スミスほどの論理豊かで明析な人物が平然と並存させているか、という「謎」がいつまでも残る。ついには「スミス価値論の謎」を価値論の範囲で解明することを断念し、イギリス「市民社会の思想体質」に解消する見解さえ現われるに至った(和田重司氏〔24〕291頁)。他面では、あい対立する両概念を新たな解釈によって、なんとかスミスなりに統一されたものであることを示そうという試みが現われることになった。藤塚知義氏の『アダム・スミス革命』がそのさ

きがけといつてよいだろう。羽鳥卓也、船越経三、揚武雄、中村広治、稲村勲、等の諸氏が、立場にそれぞれ相違があるとはいえ、基本的にこの流れにあるとみることができる。だがこの「内在的」解釈の試みがい反する二つの見解の統一に成功しえたかどうか疑わしい。むしろ、無理な解釈をさえもらしたようにみえる。「内在的」解釈が「超越的解釈」の難点を克服しえたかどうか、も問題がある。一面ではマルクスの「超越的解釈」を批判しながら、他面ではマルクスの解釈を固定的に前提としてしまっている、というチグハグな態度が、ここでも見られるのである。これらの研究もスミス価値論の解明に新しい展望を拓いたとはいえない。混迷が深まったとさえいえるであろう。

戦後、価値論以外の『国富論』の形成史的分析や思想史的・経済史的・社会史的研究が蓄積され大きな進展があったのに、価値論研究では、大きな進展があったとはいえない。一面では『剰余価値学説史』の克服が意図されながら、基本的にマルクスのスミス理解の水準に留まっている。それはなぜであろうか。われわれは、それは戦後日本での『資本論』研究の発展——たんなる解釈史としてのそれではなくて、原理論としての再構成としてのそれ——の成果を、スミス研究に充分生かしていないからではないか、と考えている。価値論は本来原理的な問題であるので、周辺的な思想史的・経済史的・生成史的分析は参考になるが、それらだけをもって分析しえない性質をもっている。基本的に原理的に解明するしかないのである。さきのスミスの読者への注意——「それ自体の性質がはなはだしく抽象的な問題」——もこのことを示唆していないだろうか。この意味で、スミス価値論の解明に新しい展望を拓くためには、『剰余価値学説史』や『資本論』を超える価値論の新地平が必要なのである。そして戦後日本の研究はそれを与えている、少くとも与えようとしている、のではないだろうか。

このようにいうと、「スミスの中にマルクスのみを見る」(高島善哉氏)という「超越的批

判」への新たな回帰のように思われるかもしれない。確かにそれに陥る危険はある。しかし、自己の一定の価値論理解を前提しないスミス価値論の解明なるものはありえない。それはマルクスによる「超越的批判」を拒否し、『国富論』へ思想史的・経済史的・生成史的にアプローチした人々も、マルクスにもとづく「超越的批判」を避け「内在的解釈」に徹しようとした人々も、ことスミス価値論の解明となると、無意識のうちにマルクスを（もっとも悪いのは、自分勝手な理論を）前提してしまっていることにも示されている。『剰余価値学説史』や『資本論』のような画期的成果を与えられている現代人にとっては、古典的理論の解明に、この成果を無視して、古典自体の内在的解釈に徹することは不可能なのである。それは大人になった人がもはや子供になれない、子供ぶることしかできないのと同じである。しかし、すでに述べたように、現在のスミス価値論の解明は、マルクスのスミス解釈がドグマようになって大きな制約を与えることになっている。「超越的批判」という非難が起ったのは一定の理由があるのである。

ここでわれわれはジレンマに陥るかにみえる。「超越的批判」を避けて内在的解釈に徹しようとするれば混迷が深まり、新たな理論をもってすれば、新たな「超越的批判」に行きつくのではないか。われわれはこの点につき、つぎのように考えている。古典的理論それじしんの内在的解釈も、正しい現在の理論を前提するのであり、両者は本来両立可能であるに違いない。それが「スミスのうちにマルクスのみを見る」というような「超越的批判」に陥るのは、実は依拠した理論そのものに不備ないし誤りがあるからであり、それが理論を前提して内在的解釈するさいの方法に歪みを与えるためはないか。マルクスへの依拠が一定の成果を生みながら、現在では制約になってしまっているのも、『剰余価値学説史』段階のマルクス価値論理解を、絶対化してスミス解釈に適用したために起ったのではないだろうか。戦後の『資本論』研究は、

1861～3年段階の『剰余価値学説史』から1867年の『資本論』第一巻刊行まで、そしてそれ以降、とマルクスの価値論理解には進展があったことを明かにしている。さらに『資本論』の価値論さえ、原理論完成の途上のものであり、けっして完成した無謬の正しさをもたないこと、どこに不備があり、それをどう正すべきか、をも明かにしてきている。このかぎりでは、『剰余価値学説史』や『資本論』のマルクスが悪いというよりは、それを絶対化してスミス解釈へ適用しようとした後世の人々が悪かったのである。どの部分が正しい成果であり、どの部分が誤った点かを明きらかにして、限度をもってマルクスを生かせなかったために、「超越的批判」と「内在的批判」の分裂、ディレンマに陥ったのではないだろうか。

新しい理論が正しければ、古典の内在的解釈と両立しえ、スミス価値論の解明に成功しうる、というのは、しかし、あくまでも一般論にすぎない。かりにわれわれのこの主張が正しかったとしても、われわれの価値論が正しくてスミス価値論の解明に成功するか否かは、全く別なことである。すでにわれわれの価値論じしんは『価値論の新地平』[49]で公表している。以下、これが前提になっているが、スミス価値論の内在的解明を試みてみよう。

といっても、戦後の新しい『資本論』研究——原理論としての再構成——を基礎とするスミス価値論の解明は、われわれが最初なのではない。すでに少数ではあるが、おこなわれてきている。時永淑氏の『経済学史』を代表とする、平林千牧、小黒佐和子、長島伸一、等の諸氏の研究がそうである。われわれの研究もこの流れに沿うものである。これらの諸氏の成果をふまえてもう一步前進してみたい。いうまでもないことであるが、このような研究の方向は、けっして特定の立場にたったスミス解釈——その立場で見れば正しく、別の立場では誤りか無意味という——というのではけっしてない。スミス価値論の理解として正しいか否かは、与えられた資料

(文献)との適合性と論理の合理性によって客観的に検討しうるものである⁽¹⁾。

I スミスにとっての価値形成過程

1 通説(投下労働価値・支配労働価値説の並存)への疑問

スミスの価値論は、しばしば資本と土地所有の発生以前の単純商品生産社会では投下労働価値説をとっていたが、それらの発生した資本主義社会では、それを放棄し支配労働価値説をとっている、と解されている。これにたいして藤塚知義氏は、「通説に見る見解のほとんどすべてが、スミスの投下労働価値説のみを正しい規定となして支配労働価値説を以て誤れる規定となし」ていることを批判し、「むしろこの二つの規定の並列そのものの中に、価値を作る労働としての『一般的・社会的・労働』……が事実上把握されている」(〔12〕30～31頁)と述べた。これにたいして、岡崎栄治氏は「スミスの二重性そのものについていえば、それは藤塚教授のいわれるようにスミスの功績をなしているどころではなく、むしろ反対に、彼の価値論および分配論の非常な限界をなす」(〔13〕10頁)と批判する。

「通説」にあっても、両氏にあっても共通するのは、スミスには投下・支配の二重の労働価

値説が存在しているという考えである。そしてこの共通見解は、『剰余価値学説史』からきており、他説を批判するさいの自説の根拠も、そこに求めている。自説の方がマルクス説に合致している(だから正しい)というのである。しかし、通説どおりスミスに二つの価値説が並存している、ときめてかかってよいのだろうか。

広く投下労働価値説が展開されていると考えられている第5章は、スミス自身が第4章末で「交換価値の真の尺度 real measure とはどのようなものであるか、すなわち、すべての商品の真の価格はどのようなものに存するか、ということをお明かにする」〔1〕148頁, p. 46)と指摘しているように、正確には労働＝価値尺度論であって、直接、投下労働価値論なのではない。副題の「商品の労働価格および貨幣価格」でも示されているように、商品の価値が一般に貨幣によって尺度される事実を前提したうえで、貨幣での価値尺度は「名目価格 nominal price」にすぎず、直の価格 real price は労働により価値尺度されたものである、という主張が主題である。通常、経済学では名目という用語は実質という用語と対比して使われる。スミスもこの対比で使っているのである(だから訳本によっては real を実質と訳す場合もある)が、ここでのスミスの使い方は、マルサスが異議をと

(1) 西欧での代表的な経済学史家といわれるホランダールは『アダム・スミスの経済学』を論じるのに「スミスの所論を注解するにあたって、労働量価値説や労働費用価値説に多大の注意をはらうのは、われわれの考えでは、正しくない」(〔56〕169頁)とスミス価値論の中核部分である第5章を実質所得の「指数問題」や「賃金単位」や労働不効用関数論に解消している(179～181頁)。自己の一般均衡論ないし新古典派理論からする「超越的批判」であり、「理論の専制」といってよい。スミスの労働価値説を論じえないで、どうして新古典派を称しうるのか、「反古典派」ではないか、というドップの怒りも当然である。

しかし、これに『剰余価値学説』のマルクスの「超越的批判」を並べ、双方の「理論の専制」を非難して、理論不信に墮しているのは間違っている。基準とされた理論そのものがまず検討されねばならないのである。このようにケンカ両成敗すると、マルクスの場合、その「超越的批判」という一面にもかかわらず、「内在的批判」に一定の重要な手掛りを与えている成果をも否定することになる。ブローグも「スミスは労働価値説と正当によべられるようなものを定式化しようとしたのではなかった。第5章は主観的福祉の労働理論」(〔55〕70頁)といっている。

古典の理論を理解するためには、内在的解釈だけでなく、自分自身の価値論ないし理論が前提とならざるをえないが、この前提の仕方には積極的前提と消極的前提の二つがある点に注意せねばならない。前者では自己の理論によってのみ古典を解釈し、内在的解釈を無視ないし歪めてしまう。「超越的批判」であり「理論の専制」である。古典研究では文献の内在的解釈が出発点であり、たえず前面に立つが、けっしてそれだけで自立しうるのではなく、その内在的解釈にはその後の価値論ないし原理論の発展の成果を背後において基礎とせざるをえないし、内在的解釈の高さもこの理論の高さに基本的に制約されざるをえない。これが理論の消極的前提であり、これがわれわれの考えである。

あり方からすれば背後にしかないから消極的であるが、内在的解釈の発展もこれなしにはありえない高さもこれに制約される、という意味では、少なれば少ないほど良いというような消極的なものではない。学史研究は理論研究のたんなる例解や応用ではないが、といって、理論研究から独立した自己完結的な分野なのでもない。原理論研究の成果を、消極的であっても、必ず前提とせざるをえないのである。

なえたように（〔4〕19頁）、きわめて特殊である。名目にたいする実質という以上の意味がこめられている。貨幣価格は便宜上のもので、本当の価格は「労働価格」である、というのがスミスの言いたい点なので、しばしば「真の」あるいは「真実の」と訳されるわけである。

資本主義社会の実際をみても、あるいは理論的にも（マルクスの価値形態論）、商品の価値は貨幣によってしか尺度されえない。むしろ、スミスもその事実は知っている。にもかかわらず、あえて労働による商品価値の尺度によって、商品の「真の価格」ないし価値を主張している。

その理由づけは、以下の三つである。①「分業が徹底的におこなわれると1人の人間が自分自身の労働で充足しうるところは、これらのうちのごく小さい部分にすぎない。かれはそのほか大部分を他の人々の労働からひき出さねばならないのであって、かれは自分が支配しうる労働量、つまり自分が購買できる労働量に応じて、富んでいたり、貧しかったりせざるとえない」（〔1〕(1)150頁p. 47）。いわゆる支配労働はこのコンテキストで出る。②「労働こそは、最初の価格、つまりいっさいの物に支払われた本源的購買貨幣であった。世界のいっさいの富が本源的に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってである」（〔1〕(1)151頁p. 48）。いわゆる労働＝本源的購買貨幣説である。③「金・銀は、あらゆる他の商品と同じようにその価値が変動」する。「それ自体の価値が変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、または比較されうるところの、窮極の、しかも真の標準である」（〔1〕(1)156頁p. 51）。いわゆる不変の価値尺度論である。

「労働の価格」ないし価値、つまり賃銀、が商品と同様に価格が上下する事実を知りながらも、スミスは、資本家は「等量の労働を、あるときは比較的多量の、またあるときは比較的少量の財貨で購買するのであって、かれにとっては労働の価格は他のいっさいの物のそれと同じように思われる。かれにとっては、前者のばあ

いにはそれが高価で、後者のばあいにそれが安価であるようにみえる。けれども実際には、前者のばあいに安価で、後者のばあいに高価なのは財貨なのである」（〔1〕(1)157頁p. 51）、とまで強弁して労働＝価値尺度論を主張している。

ここでは尺度となる労働の価値の不変性をあくまでも守護するために、商品価値の投下労働量による規定が犠牲にされているとさえ言えるだろう。

以上でわかるように、第5章の主題は労働＝価値尺度論であって、直接、投下労働価値説なのではない。

さきの理由づけ①に続いている「それゆえ、ある商品の価値は、それを所有してはいても自分自身に使用または消費しようとは思わず、それを他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品がその人に購買または支配させうる労働量に等しい」という文章も、たんに商品の価値は支配労働量によって決定される、と言っていると解するのでは不十分であろう。それに続く「それゆえ、労働はいっさいの商品の交換価値の真の尺度である」の説明であり、むしろ支配労働＝尺度論を意味している。

この点は、資本と土地所有の発生により、賃銀だけでなく利潤、地代が登場する第6章でも貫いている。利潤が第2の、地代が第3の「価格の構成部分」をなすことを述べた後に、「注意されなければならないのは、価格のさまざまな構成部分の真の価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働量によって測られる、ということがある。労働は、それ自体を労働に分解する部分の価値を測るばかりでなく、それ自体を地代に分解する価格部分の価値およびそれ自体を利潤に分解する価格部分の価値をも測る」（〔1〕(1)191頁 p. 67～8）、という文がそれを示している。

以上から、第5章を単純に投下労働価値説と解するのも、第6章を支配労働価値説（支配労働での価値決定）と解するのも、問題があることがわかる。

2 マルクスのスミス批判の限度

にもかかわらず第5章が投下労働価値説いいかえると、投下労働による価値の決定、を主題としているかのように解されてきたのはそれなりの理由がある。マルクスのように、そこでは「すべての労働者が商品生産者であり、単に自分たちの商品を生産するだけでなく、それも売りもすると仮定」(〔6〕I, 51頁 S. 42) されている、と考えられたからである。つまり単純商品社会において「諸商品がその価値どおりに売られるならば、労働者は、12時間労働の生産物をもって、他の一商品の形態での12時間の労働を、すなわち他の一使用価値に実現されている12時間労働を、再び買うのである。したがって彼の労働の価値は、彼の商品の価値に等しい」と想定される。そしてマルクスは「この前提のもとでは、労働の価値(一定量の労働をもって買うことのできる商品量、または一定量の商品をもって買うことのできる労働量)が、商品に含まれている労働量とまったく同じように、商品の価値の尺度として通用しうる」(以上〔6〕I, S. 43) と考えた。要するに、価値は支配労働量で尺度されるといっても、この場合は、各商品に「含まれた労働量」(投下労働量)を基準に尺度されるのであり、事実上投下労働価値説を主張しているのと同じことになる。

ここから、投下労働価値説と解せる部分が評価され、そう解せない部分が非難されることになる。「彼は、商品の価値がそれに含まれている労働時間によって規定されるということを、商品の価値が労働の価値によって規定されるということとたえず混同し……動揺して」いる(〔5〕S. 45)、とスミスを批判したのもこの考えからきている。スミスが労働=本源的購買貨幣説をとく部分でのべた、諸商品は「一定量の労働の価値を含んでおり、われわれはそれらを、そのときに等量の労働の価値を含んでいると想像されるものと交換する」という文に対して、「ここで価値という言葉は余計であり無意味である」(〔6〕I, S. 47)、と批判したのも、この考えからくる。

このような批判は、リカード同様に投下労働

価値説を正しいものときめてかかったものであるが、スミスの価値論が基本的に労働=価値尺度論であって直接、投下労働価値説を主張しようとするものでない以上、一面で投下労働価値説を見つけることはできて(それは尺度論といっても基準の問題が含まれてくるからであるが)、他面多くの矛盾し、混乱した、そぐわない部分にぶつかるのは当然といつてよい。その部分を切捨てるだけの批判であれば、スミスの真意をとらえないことになるだろう。『剰余価値説史』の成果は認められながら、「超越的批判」という非難が消えないのも理由がある。といつてもわれわれは、マルクスの投下労働価値説にもとづく批判が誤っているというのではない。スミスの地平を突破して、価値論を発展させるためには、そのような一方的批判もやむをえないし、必要でもあった。しかし現在のわれわれは、スミス批判のさいマルクスが依拠した投下労働価値説(価値論)が完成途上にあり、不備を残している点を明らかにしている。投下労働価値説ならどれも正しいというのではない。実際、ここでのスミス批判も「アダムは商品の価値をそれに含まれている労働時間によって規定しはするが、そのあとでふたたびこの価値規定の現実性をアダム以前の時代へ追いもどしている」(〔5〕S. 44)という考え、つまり投下労働価値説が真に成立するのは資本の生産過程においてである、という考えによっている。リカードに共通する面があるが、労働力商品の発見、剰余価値概念の確立、絶対的・相対的剰余価値論の成立、等を伴った投下労働価値説であつて、リカードを超えていた。しかし、まだ商品論と貨幣論を投下労働量にもとづく等価交換として展開し、それを前提に資本の生産過程で価値法則を展開するという方法に立つ投下労働価値説——したがってこの考えが『国富論』理解にも投影されて第5章を単純商品社会、第6章を資本主義社会、という捉え方になっている——であつた。マルクスの価値論は『資本論』第1巻までさらに進展するのであるが、商品論で価値実体をとくという考え方は残ることになった。われ

われはこの投下労働価値説のどこが誤りであり、どう直せばよいかを明きらかにしうる段階にある。この意味でスミス価値論批判のさいマルクスが依拠した投下労働価値説の限度をふまえることによって、スミス批判の限度——その肯定面と否定面——を明きらかにし、スミスの真意にヨリ接近したうえでの批判が可能になる。「超越的批判」の克服は、このようにしてなされうるに違いない。

この期のマルクスの投下労働価値説の限界は、労働＝内在的価値尺度、貨幣＝外在的価値尺度という考え方にもある。この点は、その後の価値形態論の発展によって、新たな展望が可能な地点に到達しつつあったと推定しうるが、『資本論』第1巻の価値尺度論でやはり残った。

もう一つの限界点として、価値形成過程の実体的根拠となる労働過程論の理解の欠如と言われないまでも不充足さを指摘できる。この点は『資本論』第1巻で飛躍的に確充されたのであるが、労働の二重性がそこで明確に措定されず、有用労働に偏して促えられているために、その社会一般性は強調されながら、不備を残している。この点は、スミスの労働＝本源的購買貨幣説に対するこの段階のマルクスの無理解——全く言及されてない——に端的に現われている。

基本的に以上の三点が、マルクスのスミス解釈に大きな制約を与えている、といつてよいだろう。スミスの真意に則した内在的解釈は、マルクスを離れてただ資料に則しただけでは成立しないであろう。マルクスの限度を明確にしたうえで、資料に則することが必要なのである。（このような研究態度は、すでに時永淑氏〔23〕や平林千牧氏（〔38〕とくにその4）、等によっておこなわれつつある）

3 スミスの労働価値説

スミスは分業の完全な発展の極点において、経済学史上はじめて、資本家、賃労働者、土地所有者からなる一社会としての資本主義（スミスの言葉では商業社会 *commercial society*、ないし文明社会 *civilized society*）を構想した。それはリカードの『原理』やマルクスの『資

本論』が理論上の対象とした産業資本の支配する純粋資本主義社会の歴史上最初の形成にほかならない。そして資本主義社会の経済法則を最初に探求した。この意味で『国富論』は経済学の誕生、あるいはむしろ経済学原理論の誕生といつてよい。原理の名は、スチュアートの書よりもこの本にこそ一層ふさわしい。社会一般的な分業の発展の極点に特殊歴史的社会としての資本主義を把握する方法から宿命づけられ、この書は資本主義社会の特殊歴史性——商品・貨幣・資本の形態規定性および資本・賃労働関係の階級性の認識——が欠けている。この弱点にもかかわらず、むしろこの弱点ゆえに、資本主義社会が特殊形態をもってであれ社会存立の一般的根拠（労働生産過程）を完全に把握している面、実体的側面——資本主義的富の源泉は労働であり、資本の生産力の根拠は労働生産力（「分業」）であり、貨幣的富の実体は労働生産物（「生活必需品および便益品」）である——を力強く捉えている。彼の経済理論の根柢をなすものが労働価値説である。以上は、すでにこれまでの研究が明かにし、よく言われていることである。

そしてその礎石をなす労働価値説とは、投下労働価値説と一般に考えられている。しかし、すでに指摘したように、彼の価値論が本格的に展開されている第5章の主題は、労働＝価値尺度論であって直接、投下労働価値説を説いてはいない。そのテーマが価値尺度論であることが認められても、等しい量の投下労働を前提として価値尺度論が展開されていると信じられることが多い。第5章の第1パラグラフ（理由づけ①）の終りで、「商品の交換価値の真の尺度」を設定したスミスは、続く第2パラグラフ（理由づけ②）で有名な価値＝「労苦や煩勞 *toil and trouble*」や労働＝本源的購買貨幣説を展開するが、これは、価値尺度の基準となる投下労働価値説をスミスが主張したと、しばしば解されている。

しかし注意してみればすぐ気づくように、スミスは商品の価値は *toil and trouble* である

といっているのではなく、商品の「真の価格」real price がそうであると言っている。また「貨幣または財貨は、一定量の労働の価値を含んでおり、われわれにそのときそれらを等量の労働の価値をふくむと思われるものと交換する」と述べており、けっして「一定量の労働を含む」とはしていないし、等投下労働量で交換する、とも言ってない。マルクスがいらだって「価値という言葉は余計であり無意味である」と叫んだ部分であるが、スミスの言わんとした内容を捉えていないのではないだろうか。スミス自身も「あいまいさ」を認めており、「混乱」と「動揺」を示しているが、他面では投下労働価値説をもって解釈しようとするマルクス自身の「混乱」と「動揺」をも感じられないだろうか。

われわれは、このスミス価値論の理解の重要な部分を、以下のように解する。

マルクスが「労働過程」で明かにしたように、自然にたいして働きかけることによって労働力を支出し生産物を自然から獲得する関係（人間が自然へ働きかける物質代謝の過程）は、どのような社会形態であれ、人間の社会一般的な存立条件をなしている。この過程をスミスは、自然にたいして労働を支払い、自然から生産物を買う、という売買関係ないし商品交換関係でもって、捉えている。社会一般的な分業が最初から商品生産として捉えられ、特殊社会的な商品交換が人間の本性としての「交換性向」からきている、と考えるスミスにとっては、必然的な生産過程の認識である。自然から生産物を買うという側面で労働支払を捉えると、労働支出は貨幣支払に擬せられる。「労働こそは、最初の価格、つまりいっさいの富が本源的に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってである」という言葉は、これを意味している。「貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得できるのとちょうど同じだけの労働によっ

て購買されるのである」というのもこの意味である。このかぎりでは、「真の価格 real price は……toil and trouble である」というときの toil and trouble は、労働者の主観的な表現であるが、実質的には労働支出のことが考えられているといつてよい。それは心理的な効用学説につながるような負効用 disutility なのではない。

しかしだからといって、このパラグラフを単純に投下労働価値説と解するのは問題がある。労働を支払って自然から生産物を獲得する関係を、貨幣による購買ではなくて、商品交換の関係とみれば、労働支出は労働商品の譲渡とみなされ、労働商品と生産物商品の交換関係として生産過程がみられることになる。生産物が商品であり価値をもつのも、交換された労働が商品であり価値をもっていたからと解される。「労働の価値」という考えはここから来ている。だから、スミスにとっては労働生産物はすべて「労働の価値」をもっていることになる。スミスが「貨幣または財貨は、一定量の労働の価値をふくんでおり、われわれはそのとき、それらを等量の価値をふくむと思われるものと交換する」といったのも、この考えが根柢にあったからに違いない。

だからスミスの説は、正確に言えばけっして投下労働(=支出労働)量によって商品価値の大きさが決定される、という投下労働価値説なのではない。あたかも労働商品の価値が交換をおして生産物商品へ移転するかのような考えなのである⁽²⁾。商品の等価交換もスミスには、直接等労働量交換なのではなくて、等「労働の価値」交換なのである。『国富論』冒頭の富とは「生活必需品および便益品」であり、「国民の年々の労働」がその資源 fund である、というスミスの自信に満ちた宣言も、実はこの考えからきていると考えるべきであろう。一見すると商品経済を捨象した社会一般的なことをいっている

(2) この考え方は、宇野弘蔵の発言〔18〕に触発された時永淑氏の労働＝本源的購買貨幣説（『経済学史』〔21〕）に示されている。この点は鎌倉孝夫氏（〔34〕121～6頁）と長島伸一氏（〔48〕19頁）によって、一層発展されている。

ただし後でみるように、時永氏にあっては、第5章＝単純商品社会＝「初期未開の社会」というマルクス以来の通説が、枠としてあり問題を残しているとおもわれる。

ようであるが、そうではない。スミスにとって富たる「いっさいの生活必需品および便益品」は最初から商品なのであり価値をもつものであり、そしてその価値の源泉は労働がなすのであるが、それは労働生産物の獲得のために労働商品が支払われ、「労働の価値」を含むからである。けっして、リカードやマルクスが想定したように、直接、投下労働価値説にもとづいて、富の fund は労働であり、価値の源泉が労働であると考えているのではない。それまでの価値源泉への土地ないし自然の作用の混入（ペティ、重農学派）から土地・自然の作用を捨象し、特定の有用労働ではなくて労働一般を、価値の源泉としてはじめて確立する、というスミスの学史上の画期的功績（マルクスが指摘している）も、この労働＝本源的購買説、ないし労働＝本源的の商品説、に拠っていたのであって（〔21〕235頁）、直接、投下労働価値説に拠っていたのではないのではないか。実際、『国富論』の中には、投下労働価値説を暗に想定して論じているのではないかと思われる文章にあって、直接、投下労働価値説を説いている文はないのではないだろうか。もしスミスがそれを書こうと思えば一行でもって書けるのである。

投下労働量によって価値が決まるという考え方は、種々の不備が伴っていてもスミス以前の経済学に部分的に散見していたはずであるから、この考え方をスミスが知らなかったと想像する

ことはできないだろう⁽³⁾。知っていながら、スミスは意識的に、直接、投下労働価値説をとることを避けているようにさえ、われわれには感じられる。しかしだからといってスミスには支配労働価値説しかない、というのではない。これでは依然として投下労働・支配労働という通説の枠内にある。それはともかく、「労働の価値」の「価値は余計であり、無意味である」という批判が、スミスの価値論の真意を捉えていないことだけは確かである⁽⁴⁾。

以上のように、スミスの価値説が投下労働価値説というよりも「労働の価値」説であるということは、スミスが投下労働価値説を否定しているとか、それと無関係であるということの意味しない。「労働で購買される」というとき、あるいは労働商品（ないし労働＝貨幣）を考える場合、その労働の量は、マルクスの労働力商品のように生産過程の開始前に存在しているのではなく、生産過程で技術的に必要となる労働支出、つまり投下労働量、で考えられているとみられる面があるからである。このかぎりでは、彼の説は投下労働量が価値量を決定する（あるいは支出労働が価値を形成する）という説そのものではないが、実質的にそのような内容をも含みうるものになっている。マルクスは『経済学批判』で、スミスが「商品の価値がそれにふくまれている労働時間によって規定される」ということを、商品の価値が労働の価値によって規定

(3) ミークは「商品の交換が、本質においては、それを生産した人々の労働の交換であるという見解は、世紀（18世紀、引用者）がすすむと、なにかあたりまえのことになった」（〔52〕41頁 p.41）と述べている。

(4) この「労働の価値」がスミス価値論の理解にとって重要である点に、高島善哉氏は注目している。しかし、それが「労働量によって測られた価値という意味」（〔9〕146頁）という説明は、スミスが投下労働価値説に立ってそういう言い方をしていることになり、このかぎりでは、マルクスの「余計」説と似たものになる。「見方によってはまったく無意味な論法」（147頁）という表現にそれが示されている。「肝腎なことはすでに商品に含まれている労働の価値が問題なのか、それともこれから商品に含まれようとしている労働の価値が問題なのか」（149頁）という問題のたて方に、やはり「スミスのうちにマルクスをみる」ことになっていないだろうか。氏は「価値の尺度としての労働」という考え方を、マルクスの「内在的価値尺度」論によって

肯定している点も問題がある。

武井邦夫氏は、スミスの第5章の「労働の価値」を賃銀ととる「リカード＝マルクス解釈はまちがいに判定」（〔46〕8頁）、それは「事実上は労働量を意味している」とされている。労働量を意味するものを、なぜスミスが「労働の価値」と呼ぶのか、それをも説明する必要があるだろう。

島博保氏〔44〕や長島伸一氏〔48〕によって、『国富論』におけるスミスの労働概念の多義性が鋭く分析されているが、スミス価値論の理解にとって有効である。例えば、島氏はスミスの労働には「投下労働、はぶく労働、支配労働」の3つがある（同40頁）と指摘している。確かにそのような面があるが、問題はなぜそのような多義性をもつことになったのか、にあるのではないだろうか。スミス自身は最初から多義的に使おうとしたのではなく、結果的に、われわれから見て多義的になっているのではないか。

されるということとたえず混同し……動揺して」いる ([5] S. 45), 批判している。このさいマルクスはスミスの「労働の価値」を労働力の価値、つまり賃銀と解しているが、この部分に関するかぎりそのようにとるべきではないであろう。「労働の価値」説は、むしろ支出労働による価値形成の、スミスなりの独自の把握とみるべきであろう。

労働＝価値尺度論の理由づけ③——「労働の価値」の不変性——でスミスは次のように主張している。「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である、といってもさしつかえなからう。かれの健康、体力および精神が平常の状態で、またかれの熟練および技巧が通常程度であれば、かれは自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに犠牲にしなければならない」 ([1] (1)156頁 p. 50)。これもあらゆる労働者の労働が支払われてあらゆる生産物が商品としてえられる場合、それらの商品の価値をなす「労働の価値」は、社会的に同質であり「同一」であることを言っていると解される。それは価値を形成する労働の社会的同一性によること、いいかえると抽象的人間労働によること、のスミスなりの捉え方とみることができる。価値を形成する投下労働の同一性（抽象的人間労働）の認識が、スミスにあっては「労働の価値」の同一性という廻り道をとっている。だから「犠牲」の同一性に見えてしまう。しかし、これは他面からすると、スミスがまさに抽象的人間労働を「予感」(『資本論』第1巻第1章註16)したことを示している。確かにマルクスのいうように「社会的過程が等しくない労働のあいだで強制的になしとげる客観的な均等化を、個人的労働の主観的同権化と誤認している」 ([5] S. 45) といっただけでよい。しかし他面からみると、スミスが「労働の価値」概念を介して、資本の生産過程が価値形成過程としておこなう事態を、「誤認」を通してであれ、感知していたことを示している。けっして賃銀の同一性に局限して理解すべきではない。マルクスがこの文の中に有用労働の抽

象労働への還元の問題を読みとった点は、彼の眼力を示している。彼じしんの価値論が価値の実体として「抽象的一般労働」を認識しうる高さまで達した(『経済学批判』の商品論にその程度が示されている)ことが、これを可能にしたのであって、たんなる文言の解釈からこの読み取りが可能であったわけではない。

以上からわかるように第5章は、基本的に単純商品社会の労働価値説なのではなくて、むしろ資本の生産過程でのそれと理解すべきであろう。つまり、5章と6章との関係は、この期のマルクスが考えたような単純商品社会と資本主義社会との関係ではなくて、むしろ価値形成過程と価値増殖過程の関係に相当すると考えるべきでないだろうか。

『資本論』第1巻商品論の註(労働二重性論)の中でマルクスは次のように言っている。「一方では、A・スミスはここでは(どこでもないが)商品の生産に支出された労働量による価値規定を、労働の価値による商品価値の規定と混同し〔傍点マルクス、こゝまでは『経済学批判』『剰余価値学説史』と同じ〕、したがってまた等量の労働はつねに同じ価値をもつことを示そうとする〔ここからは新しい認識〕。他方では、彼は商品の価値に表わされるかぎりでは労働はただ労働力の支出としてのみ認められるということに予感してはいるが、この支出をふたたび休息、自由および幸福の犠牲と考えるだけで、正常な生命活動とさえ考えてはいない。もちろん、彼が見ているのは近代的賃銀労働者ではあるが」 ([7] Ia, S. 61)。『経済学批判』では「誤認」でしかなかったものが「予感」という形で、ヨリ積極的な評価に変っている。それは彼の有用労働の捨象による、価値の実体をなす「抽象的人間労働」の把握がより進展(賃労働者の「労働力の支出」の一面としての抽象労働の認識)したことを背景にしている。『資本論』の労働二重性論と『経済学批判』のそれを対比すれば、その進展のほどは明瞭である。

しかしわれわれは、この変化をさらに進めてスミスが「等量の労働はつねに同じ価値をもつ

ことを示そう」とし、労働力支出を「休息、自由および幸福の犠牲と考える」ことをとおして、資本の生産過程における抽象労働の価値形成の問題を、スミスが「予感」しそれに触れていたことを、評価すべきであろう。だが、そのためには抽象労働による価値形成の問題が商品論から資本の生産過程（価値形成過程）に決定的に移される（それは宇野弘蔵『経済原論』ではじめて達成された）という、原理論認識の一層の進展が必要であるといつてよい。マルクスは、ここで明きりとスミスが見ているのは近代的賃銀労働者があるといっている。第5章＝単純商品社会説と抵触しかねない考えが出てきている。しかしこの『剰余価値学説史』段階の考え方が根本的に反省されるためには、やはり商品論での価値実体論を問題視しうる、価値論の新たな進展が必要であったであろう。

マルクスがスミスを「犠牲を考えるだけで正常な生命活動とさえ考えてはいない」と批判したのは、疎外なき社会では労働は「正常な生命活動」であるという初期以来の彼の社会主義的見地からのものである。このためにスミスの価値論が実質的に「近代的賃労働者」つまり資本の生産過程を対象にしたものである、という評価は積極的に出ないことになっている。この点は、「A・スミスの匿名の先行者」にたいする「はるかに適切」というマルクスの高い評価にも現われている。「ある人が一定の時間に一つの対象に費やした労働と、他の人が同じ時間に他の一対象に費やした労働との交換である」という考えが評価されている。スミスのように等「労働の価値」交換ではなくて、等労働量交換が主張されている。というわけであるが、これは商品交換は労働の交換であるという認識による投下労働価値説にすぎない⁽⁵⁾。しかしこのようなきわめて常識的な価値論では、一社会としての資本主義の根本法則をなす価値論にはけっして発展しえなかった。スミスがこのような価値論に拠らず、「労働の価値」あるいは労働＝価値尺度論を駆使して、価値法則が真に成立する資本の生産過程での価値形成過程を「予感」し、それを事実上対象とする（その歴史的基盤がまだ充分には成立しておらず⁽⁶⁾、それは多分に観念の上であり、彼の自然法思想の助けを必要としたのであるが）ことになっている点こそ、先行者にたいするスミス価値論の比類のない高さを示しているのではないだろうか。

したがって、スミスの価値論を、投下労働価値説あるいは支配労働価値説（支配労働による価値決定）、あるいは両説の並存（分裂）、と解するのはいずれも問題がある。といつても「スミスが労働価値論をもっていなかった」（ブローグ [55]56頁）というのではない。労働＝価値尺度論の主張のうちに投下労働による価値形成を含んでおり、その意味でスミス独自の労働価値説といわねばならない。スミス価値論に投下、支配労働価値説という二面があるという通説に問題があるが、といつてわれわれはスミスに二面性がないといっているわけではない。労働がそれ自体で価値をもつから労働支払と交換に獲得される生産物が価値をもつ、という考えは一面では投下労働による価値形成を含みうる

したがって、スミスの価値論を、投下労働価値説あるいは支配労働価値説（支配労働による価値決定）、あるいは両説の並存（分裂）、と解するのはいずれも問題がある。といつても「スミスが労働価値論をもっていなかった」（ブローグ [55]56頁）というのではない。労働＝価値尺度論の主張のうちに投下労働による価値形成を含んでおり、その意味でスミス独自の労働価値説といわねばならない。スミス価値論に投下、支配労働価値説という二面があるという通説に問題があるが、といつてわれわれはスミスに二面性がないといっているわけではない。労働がそれ自体で価値をもつから労働支払と交換に獲得される生産物が価値をもつ、という考えは一面では投下労働による価値形成を含みうる

(5) 小林昇氏もスミスのこの部分とマルクスが触れた匿名書『貨幣・公債利子論』1738年頃について論じている。『国富論』の方が価値論史上やはり優れているという結論には賛成であるが、スミスの支配労働価値説を「労働価値説史上での一步後退」といわれる点には賛成し難い。単純に投下労働価値善玉説に従っておられるように見られるからである。[14] I, 190頁]

(6) リカードやマルクスに比べ、スミスが対象にしたのは、産業革命の開始期であつて機械制工業制度が未確立であり、資本の生産過程を対象とする理論構築のための歴史的基盤は、全く欠けていたわけではない（マニユファクチュアという形で資本の生産過程が成長しつつあつた）、大きく欠けているといつてよい。にもかかわらず基本的に資本

家・労働者・土地所有者という三階級からなる資本主義社会像——スミスのこのような対象把握は『国富論』ではじめて可能になった。価値論の登場と期を一にしている。1764年の渡仏が契機になっていると推定してよいのではないかと——をなぜ構築したのか、というのは重要なテーマである。桜井氏の論文はその意味で参考になる。ただし、スミスが「一つの商業社会」を一国家像として捉えているのが、スチュアートの国家像からきたもので、スチュアートの「国家の外周によって全体性を事実上確保した」と言われる（[36] 68頁）点には、疑問に思う。むしろ、「一つの商業社会」の中に国家が成立しうる根拠をスミスは捉えているからこそ、スチュアート『原理』を批判したといつて自信をもっていたのではないだろうか。

ことを意味するが、他面では正確にはけっして投下労働価値説ではないという意味をもっているからである。この点は、Ⅲでみるように、スミスが価値増殖を論じるときに、露呈してくることになる。しかし、スミスにはこの関係は労働＝価値尺度説の中で統一され、二面性とも分裂とも意識されえない構造になっている点が重要である。

4 小林昇氏の商業社会説

これまで第5章＝単純商品社会、投下労働量による価値決定、第6章＝資本主義社会、その放棄、支配労働量による価値決定、という図式で理解されることが多かったのは、第6章冒頭にスミスが設定した「初期未開の社会」からきている。「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の状態のもとでは、さまざまな物を獲得するために必要な労働の量の割合は、これらの物をたがいに交換するためのある定規 rule になる唯一の事情であったように思われる」とし、「狩猟民族」のあいだでの一頭のビーバーと二頭の鹿の交換を例にあげている。そして、資本と土地所有が発生すると利潤と地代へも生産物が配分されねばならないために「こうなるとある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量は、その商品がふつう購買し支配し、またはこれと交換されるべき労働量を規定しうる唯一の事情ではない」(〔1〕(1)189頁 p.67)と述べられているからである。スミスはここで「初期未開の状態」に限定することによって、はじめて投下労働価値説——ただし、ここでも明っきり投下労働が商品価値を決定する、とか投下労働が対象化して価値となる、とか言っているわけではない——を展開している。マルクスの「たしかにアダムは、商品をそれにふくまれている労働量によって規定しはするが、そのあとでふたたびこの価値規定の現実性をアダム以前の時代へ追いもどしている」(〔5〕S.44)という批判が当たっているのはこの部分である。

したがって第5章＝「初期未開の社会」と解されると、第5章＝単純商品社会、投下労働価値説という考えが成立することになる。マルク

スの5章の理解もこれになっている。しかし、すでに述べたように、第5章が、どちらかといえばむしろスミスなりの価値形成過程論であるとすれば、5章＝「初期未開の社会」という広くおこなわれてきた通念も再検討する必要がある。

小林昇氏は、第5章＝「商業社会」を「満開した商品生産社会」と呼び、スミスはこれを「対象とする理論体系の構築によって、経済理論史における原始蓄積段階から決別しようとした」(〔14〕Ⅱ29頁)という。確かにそうである。しかし、しかしこの社会を「独立の商品生産者」のみからなる社会と考える。したがって「商業社会」の概念は、「その一面の積極的意義にもかかわらず、成立と同時に崩壊すべき必然性を内包していた……なぜなら、満開した商品生産社会は、すでに独立生産者の没落した資本主義社会でなければならぬからである」(同上)という。「賃銀労働者は、商品を生産するけれども、それを売る者、すなわち商人の機能を果たすのは、彼の傭い主である資本家だけにかぎられる……そうとすれば、あらゆる生産者がある程度商人となるような社会としての『商業社会』という概念は撞着しており、……労働者がマニファクチュアないし工場で働けばあい、彼の作業は分割されているのだから、彼は完成した商品をつくるのではなく、彼らの共同生産物がはじめて商品というものになるのである。彼は独立の生産者＝商人でないだけでなく、十分な資格をもつ商品生産者でさえない」(〔14〕Ⅱ30頁)。そうには違いないのではあるが、このようなスミス解釈は、マルクスの労働力商品化の概念や社会的分業と工場内分業との混同という批判に依拠した「超越的」な読み方ではないだろうか。確かにスミスは「商業社会」を説明するのに、分業が確立すると自分の労働によって充足しうる分は「ごく小さい部分」にすぎないとか、自分の生産物の「余剰部分のなかで、自分自身の消費をこえてあまりあるもの」が交換されるとか、交換によって生産者は「ある程度商人」になる、とか言っている

(第4章冒頭)。そのかぎりでは多分に独立小商品生産者のイメージから出発しているといっ
てよいが、「あらゆる人は交換することによ
って生活し、つまりある程度商人になり、また社会そのものも、……一つの商業社会に成長す
る」、あるいは「あらゆる人は、その人が……
人間生活の必需品……をどの程度に享受できる
かに応じて、富んでいたり、貧しかったりする」(五章冒頭)(傍点引用者)というとき、
スミスによって想定されている「商業社会」は
事実上資本主義社会なのではないだろうか。また彼の価値論が対象としている社会がそのよ
うなものであることを知らせるために「商業社会」
を展開しているのではないだろうか。

もともと社会一般的な分業が商品生産と一体化しているスミスにあっては、資本主義社会は
分業化の進展の極北でしか捉えられないもの
になっている。そのために小商品生産と資本家的
商品生産とは、同次元での量的な相違としか見
えない。『国富論』内で、両者が混在し、独立
小生産者が賃労働者になったり資本家になった
り、逆に賃労働者が独立小生産になったり資本
家になったりする流動状態で考えられているの
もこのためであろう。それは一面では当時のイ
ギリスでの資本主義の進展の現実を反映する
といっでよいであろうが、他面では彼の原理像を
捉える方法からきている。純粋化傾向にのっ
って純粋資本主義社会を抽象する方法は、彼に
とっては、「いったん分業が徹底的に成立する
と thoroughly established」であったわけ
である。

「資本家という少数者だけが商人なので
ある」という考え方はスミスはけっしてとらな
かった。独立した小商品生産者も賃労働者も、
労働生産物売るか労働を売るかの相違にすぎ
ずどちらも「ある程度商人」と考えられてい
るのではないだろうか。むしろ、労働生産物
を売るか労働を売るかはたんなる量的変化
ではなく本質的变化である。マルクスが「労働と労働生産

物との同一視」として批判したのは当然なので
あるが、スミスでは同次元的に捉えられてい
るところに特質がある。彼に原始的蓄積の考
えが欠如するのもこのためである。

「共同生産物がはじめて商品」であり賃労働
者は商人でない、という考えにも問題がある。
社会一般的な生産と商品生産とが一体化して
いるスミスにあっては、作業場内の資本家的
商品生産も社会内の商品生産も、マニフ
ァクチュアとして同質的に映るのであって、
作業内分業と社会内分業が同質的に(量的な
違い「大マニファクチュア」)しか見えない。
それはは誤った見方であるには違いないが、
むしろ、両者の同一視を可能にしたのも資
本家的商品生産の進展によるのであり、この
同一視によって彼が実質的に資本の生産過
程に視点の重点を移しえた点を、評価すべ
きであろう。

したがって「満開した商品生産社会」は満
開した単純商品社会ではなくて、実質的に
資本主義社会と解すべきであろう。「商業
社会」はスミスにあっては「撞着」してお
り「成立と同時に崩壊すべき必然性を内包」
している概念ではなくて、第5章と第6章
を通じて維持されている概念と理解すべ
きであろう⁽⁷⁾。小林氏のように解するの
は、それこそ「マルクスの眼をもってス
ミスをみる」であろう。

第5章＝投下労働、第6章＝その放棄、
支配労働価値説という理解もそうである。
『国富論』は資本主義という場の認識を
守るために、労働価値説(ただし価値規
定)の放棄という犠牲をはらった」(〔14〕
I. 217頁)、という考えも、支配労働
価値説＝投下労働価値説の放棄という
通説的理解からきている。むしろ、氏に
あっては「商業社会」＝単純商品社会＝
投下労働価値説という通説を「守るた
めに」、スミスの「商業社会」概念と
「労働価値説」——労働＝価値尺度論
を中心とする——が「犠牲」とされて
しまっているのではないだろうか。

マルクスによるスミス批判をもって学史と信

氏の論文にも見られる。

(7) この小林昇氏の「商業社会」説には、すでにいくつかの
批判が出されている。羽鳥氏以外にも、さきの島氏や長島

ずる態度を排し、「文献実証的方法の実践」と、豊かな思想史と経済史の知識をもって多くの成果をあげられた小林氏でありながら、スミス価値論にたいする場合には、それに反したものになっていないだろうか。戦後日本で発展した理論経済学の成果が生かされていないのが一因ではないかと思われる。

5 羽鳥卓也氏の反論と問題点

羽鳥氏は小林昇氏の説のうち「スミスのいう commercial society は独立商品生産者のみから成る社会のことと解すべきだ」という部分には同意することができない」(〔17〕22頁)、といい、第5章＝資本主義社会説を提唱される。その理由として『国富論』が『「分業に限なく確立された」社会について語る時、この社会に確立される『分業』にはしばしば社会的分業とともに作業場内分業もまた含まれている』(同上)と、「スミスは賃金労働者を『労働』という商品の所有者であり販売者であると捉えることができる。商品所有者＝販売者という点で、労働者は資本家と一括される」(同23頁)、との二点を挙げている。この点ではわれわれは同意しうる。

しかし、氏が第5章＝資本主義社会説を提唱されるさいもっとも積極的な論拠は、その章の各所でみられる「購買または支配しうる労働量」とは労働力の商品化ないし賃労働を念頭にしたものである、という点にある。とくに第3パラグラフの「富の所有が即時かつ直接にかれにもたらす購買力、つまりそのとき市場にあるいっさいの労働あるいはいっさいの労働生産物に対する一定の支配力」という文のなかの「市場にあるいっさいの労働」⁽⁸⁾をとりあげて、次のように主張される。「スミスのいう商品による<労働>の購買ないし支配とは、〔マルクス

が解釈したように、引用者〕市場における商品による他商品の購買ないし支配を通して間接的に行なわれる他人の労働の購買ないし支配のことなのでなくて、市場における商品による<労働>の直接的な購買ないし支配を意味しているとみなしなければならない。してみると、スミスはここでは労働力が商品化されている社会状態を念頭において議論していたとみなさなければならない……したがって、労働こそが真実の価値の尺度であると言明したとき、かれは単純商品生産社会を想定していたのだとはいえない……粉れもない資本主義社会を念頭においてこの命題を書き記していた」(〔16〕35頁)。

すでに述べたように、分業が「徹底的に確立した」「商業社会」とは、実質的に資本主義社会であり、そこでスミスは事実上価値形成過程の問題に触れていた。この意味では賛成しうるのであるが、氏がそう考える論拠には問題がある。スミスがそこで「労働の購買」や「労働の価値」を語るとき、資本の生産過程での労働力商品の売買という現実を眼にしていることは確かである。こういう現実が部分的であれ与えられなければ、そういう言葉は出てきえない。マルクスが、さきにも引用したように「正常な生命活動とさえ考えていない」と『資本論』第1巻でスミスを批判したとき、「もちろん彼が見ているのは近代的賃金労働者ではあるが」とつけ加えている(このかぎりでは『剰余価値学説史』の第5章＝単純商品社会説と矛盾することになっている)のも当然である。だが、第5章でスミスが「購買できる労働量」といったとき、直ちに賃労働者の売る労働力ないし労働力商品の売買を意味していると解すべきではないだろう。それは、すでに指摘したようにそこで「労働の価値」といっても直ちに賃銀と解すべきでない

(8) 原文は、a certain command over all the labour, or all the produce of labour which is then in the market. (p. 48) である。「市場にある」が羽鳥氏がとったように(岩波文庫もそうになっている) labour と produce of labour との双方にかかるのか、それとも後者にのみかかるのか、二つの解釈がありうるだろう。われわれは後者の説の方がよいように思うが、かりに前者であってもわれ

われの論旨に変化があるわけではないので、この解釈について争う気はない。

この文にも見られるように労働と労働生産物の同一視(マルクスがとがめた)はスミスの特徴であるが、われわれのいう「労働の価値」説からすると、そうなる理由が解けるのではない。

のと同様である。資本の生産過程において支出労働が価値形成する関係が、スミスには自然にたいしてそれ自身価値をもつ労働を支払ったがゆえに生産物が価値をもつ、と表象され、支出労働の量によって価値の大きさが決定される関係が、スミスには「購買し支配しうる労働量」で尺度される、と表象されているのだった。このかぎりでは、「購買し支配しうる労働」を、すぐ労働力商品の購買と結びつけて、「資本主義社会を念頭においてこの命題を書き記している」というのは、問題がある。彼の労働＝本源的購買貨幣説やそれを基礎とする労働＝価値尺度説が、事実上資本の生産過程での価値形成過程を論じることになっているかぎりでは、そう言われうるとすべきだろう。

羽鳥氏は、第5章の主題が「諸商品の交換価値の真実の大きさを測定できる尺度とはなんであるか」にあると明きり主張されている。さらに「スミス自身は……第5・6章のなかでは一度も支配労働量が労働価値を生み出す源泉であるとも、支配労働量が商品価値を規制する要因であるとも述べていない」（〔16〕45頁）とすぐれた見解を示されている。それを「支配労働＝価値尺度論」（同36頁）と呼ぶ。そして「スミスは資本制的商品の交換価値を規制する原理を解明する作業を……第6章で遂行する予定にしており、それに先立って、この第5章ではその準備作業として価値尺度論を展開しようとしている」（同33頁）という。確かに、第5章の主題は労働＝価値尺度論にある。しかし、だからといって、「資本制的商品の交換価値を規制する原理を解明する」のが第6章の課題であり、第5章は「その準備作業として」の「価値尺度論」——つまりその「規制する原理」を欠いた、相対的表現としての——ということになると問題が出てくる。

商品の価値ないし交換価値が「購買し支配しうる労働量で尺度される」というとき、スミスにあっては、商品ないし貨幣がたんに市場で購買しうる労働量を意味するのではなくて、暗にその商品を生産するのに必要な労働量の意が含ま

れることになっている（つまり投下労働量を支払って生産物を買う）からである。そのために価値尺度論が主題でありながら、実質的に「資本制的商品の交換価値を規制する原理」をも含むことになっている。その「原理」を第6章に「予定」したたんなる尺度論ではないのではないか。第5章が第6章を「予定」した基礎規定であるのは確かであるが、その関係は実質的にむしろ剰余価値の捨象された価値形成過程とそれを基礎とする価値増殖過程になっている（スミスが意図してそうしたと主張しているのではない、結果的にそうなっている）、と考えるべきではないだろうか。どちらも労働＝価値尺度論が表の主題とされながら、実質的に「資本制的商品の交換価値を規制する原理」の解明を含むことになっているのではないか。この二段構えの考え方はリカードの『原理』では全く消えてしまったのだが、『資本論』や宇野『原論』の価値形成過程、価値増殖過程の先行者とも見うる考え方であり、注目してよいのではないだろうか。氏に第5章をたんなる価値尺度論のように解される面があるのも、そこでの「購買し支配しうる労働」をただちに労働力商品の売買と結びつけて理解されたからではないだろうか。

他面では、羽鳥説は第5章の中に投下労働価値説＝「価値の源泉」の発見を強調する点に特徴がある。このかぎりではたんなる価値尺度論ではない、ということもできる。「第5章の主題を、商品の交換価値の真実の尺度の探求という点に設定したのは、もともとは商品の交換価値の規制原理を明らかにするための準備作業という意味あいであった。ところが、真実の価値尺度の探求の過程で、かれは読者に断りなしに、投下労働量をもって価値を規制する諸要因のひとつとみなしなければならないという考え方を提示していた」（〔16〕39頁）という。そしてスミスが投下労働価値説をとっている証拠として次の文をあげている。「アメリカの豊富な諸鉱山の発見は、16世紀にヨーロッパの金銀の価値とそれ以前の約3分の1に引下げた。それらの金属を鉱山から市場へ運び出すのに要する労働

が減少するのに応じて、それらがそこへもってこられたばあいに購買または支配することのできる労働も減少したのである」 ([1] (1)155頁)。この考え方は『剰余価値学説史』でのマルクスの「彼は事実上、意識していなかったにしても、彼が議論している箇所ではどこでも、商品の交換価値の正しい規定——すなわち商品に費やされた労働量または労働時間によるその規定——を固持している」 ([6] I S. 42) という考えと共通している。マルクスがその例としてあげているのは別の箇所 (第1編第11章 [1] (1) 212頁) であるが、意味内容は同じである。リカードが『原理』で言っている「交換価値の本源をあのよう的確に決定したアダム・スミス、……一切の物の価値は、その生産に投下せられた労働の多少に応じて大小ありと主張しなければならぬ筈のそのアダム・スミス」 ([3] 16頁 p. 13) という読み方にも共通した面がある (むしろその証拠とする場所は羽鳥氏と同じという訳ではない)。

これまでスミスには支配労働価値説と並んで投下労働価値説があると、広く言われてきたのであるが、その証拠とされる箇所は各人必ずしも同じではなかった。ここで羽鳥氏のものについてだけ批評しておこう。その文から氏は「スミスによれば、金銀の交換価値、つまり金銀の支配労働量は、その生産に投下された労働量の増減に依存して騰落ないし増減する」と解釈される。しかしスミスは、ストレートにそのようには考えていないのではないか。「要する労働が減少するのに応じて」金銀の価値ないし交換価値が「騰落ないし増減する」と考えるのではなくて、「要する労働が減少する」ことは自然に支払う「労働の価値」が減少することでありしたがって「支配しうる」労働量も減少する、と考えているのではないか。それは事実上投下労働価値説を含む意味をもっているが、それじしんはけっして直接、投下労働価値説として主張されているのではない。実際、スミスが直接、投下労働価値説をとっていたのであれば、このようにいつも「購買し支配しうる労働」という回

りくどい言い方はなされなかったであろう。といてスミスは支配労働で価値が決定されるといっているのではない。われわれがスミスの労働価値尺度説には、事実上ないし実質的に投下労働価値説を含む、というのはこの意味である。

したがってこの文をもってスミスが「投下労働量こそが商品価値を生み出す源泉であり、したがって商品価値の大きさを規制する一要因であると主張」していると解するのは強すぎるのではないだろうか。労働こそが商品価値の源泉であるという彼の考えは、自然に労働を支払って生産物を買う、あるいは「労働の価値」という迂回路を通して成立しているのであって、氏のように解するのは一面的であろう。またスミスは「第5章で執拗にこの交換価値の真実の大きさを測定するための尺度を求めつづけた。これはかれが交換価値の背後に、絶対価値がひそみ、実体をもつものとして価値が存在していることに気づいたことを意味する」 (以上[16]40頁)、という言い方も強すぎる。もし彼がそれに「気づいた」なら、彼の価値と交換価値、価値と価格(「真の価値」と「真の価格」)との同一視も解消されえたであろう。

さらに氏は「スミスは一方で商品価値の真実の大きさを測定する尺度としては商品の支配労働量を選ぶべきだと主張するとともに、他方で商品価値を生みだす源泉としては商品の生産に投下された労働量を考えるべきだと主張しているのであって、ここに価値尺度の選定と価値源泉の把握の分裂が、したがってスミス価値論の二元論的性格が早くも明確に見出される」 (同41頁)、と言われている。しかし、以上でわかるようにスミスの価値論は、支配労働量による価値の尺度論の主張のうちに結果的に投下労働による価値規定、あるいは「価値の源泉」を含むことになっているかぎりでは、むしろ両者は内的に統一されているのである。スミスが投下労働価値説ないし労働＝「価値の源泉」説をとっていると一面的に解されから、「分裂」としか映らないのではないだろうか。氏のこの考えは、第5章＝支配労働尺度説が先に見たように

一面的であるのと対応している。

さきに引用したように氏は「真実の価値尺度の探求の過程で、かれは読者に断りなしに、投下労働量をもって価値を規制する一要因とみなす考え方を提示」した。と言っておられるが、それは「羽鳥氏に」「断りなしに」「提示」したように見えるのであって、スミスにとっては「真実の価値尺度」は最初から、自然に労働を支払って生産物を買うという意味で、投下労働量による価値規定を結果的に含むことになっていて、けっして「読者に断りなしに」唐突に投下労働価値説を主張しているつもりはないのではないだろうか。マルクスの第5章＝単純商品社会説（支配労働量と投下労働量の一致）という解釈が「スミス自身の推理に内在した理解の仕方とはいえない」（〔16〕46頁）と正当な批判をされる羽鳥氏であるが、この点に関するかぎり、この批判は氏じしんにも当てはまらないだろうか。

最後にもう一点だけ触れておこう。スミスの「労働の価値」不変説を実質賃銀不変説と解する小林昇説（〔14〕I 188頁）を批判されている（〔17〕20～21頁）かぎりは氏は正しい。しかし、その論拠を「労働の価値」＝disutility説にもとめておられるのは問題である。先の *toil and trouble*、幸福犠牲論にもこの意が全く存在しないとわれわれは主張しているのではない。もしかするとスミスはそれを意識して書いたのかもしれない。しかし、それは価値を形成する労働の普遍性（「いついかなる所でも」）あるいは、資本主義社会での抽象的人間労働の形成のスミスなりの反映であるという点を見落してはならないであろう。それはスミスが意識していないのであるが、結果的に語ることになっている面である。この点は、さきに見たようにマルクスは『経済学批判』で「客観的抽象を主観的にしか解していない」と鋭く読みとっていた。羽鳥氏にこれが落ちてしまうのは、たんに「労働の価値」＝disutility説からきているというのではない。むしろ、「労働の購買ないし支配」を最初から労働力商品の売買と結びつけ、「商品の

支配労働量という言葉が資本家と賃金労働者との間での賃金と≪労働≫との交換という事態を表現するものにほかならなかった」（〔16〕38頁）という固定観念から disutility 説も出てくることになり、マルクスの鋭い視点を見失わせることになっているのではないだろうか。スミスに「内在した理解の仕方」とは一方では、スミスの考え方、意図を忠実に捉えることであるが、けっしてこれだけではない。他方ではスミスが意図していないのに結果的には意味することになっている内容をも読みとるものでなければならぬだろう。両者は一見すると矛盾するようであるが対象が正しく把握されれば、けっして矛盾しないであろう。

補論 ドップとミークの見解

スミスの価値論は、欧米では日本と大きく異なるフレームワーク内でなされているので、欧米については別稿で論じる方が適当である。ただドップとミークだけは早くからは日本に紹介され、一定の影響が見られるので、補論として触れておこう。

『政治経済学と資本主義』では、ドップはまだスミスの価値論を、リカードの立場でしか見ていない。「アダム・スミスは生産に使用される労働量のことを言ったり労働の価値のことを言ったりしていた」（〔50〕12頁 p. 13）の一言しかないほどである。つまり固有のスミス価値論は欠けている。『価値と分配の理論』ではじめてそれが展開されている。

そして第5章のテーマが労働＝価値尺度であることを、「この章で彼が関心を払っているのは、価値の原因、ないし規則 rule（すなわち原理）ではなくて、諸商品の価値とその変化が的確に評価される測定尺度なのである」（〔51〕63頁 p. 47）と指摘している。しかし、この言い方では、ドップはスミスの労働＝価値尺度説をリカードの不変の価値尺度と同じようにしか解していないように見える。「支配労働という概念は、標準あるいは尺度という脈絡のなかに置けば、価格の構成要素という意味で、『価値の原因』としての賃金という概念と類似のもの」（同66頁 p. 49）という判断は、やはりリカード的な理解にとどまっていることを示している。投下労働と支配労働という「二つの対照的な尺度は……賃金が生産された総価値のなかの割合として不変のま

までであるならば……明らかに同じ結果を生みだす」と想定した上でドップは、「そこからは、分配という主題についてのもっと広範な探求という形で、なんらかの議論が始まることを期待」するのであるが、「見出すことはできない」と失望している。それはスミスの支配労働ないし「労働の価値」が第5章では、けっして賃銀ではないから当然なのである。ドップにあっては、主題が労働＝価値尺度であると言いつつ、そのリカードと異なる固有の意味も、またそれが含蓄している投下労働との関係も、全くつかめていない。スミス論じしんはすぐれているのであるが、価値論については評価すべきものはない。

これに比べると、ミークの『労働価値論史研究』は、本格的なスミス価値論を展開している。現在のところ西欧における最良のものかもしれない。スミス以前の価値論や『国富論』までのスミスにおける価値論形成論も見られる。第5・6章についての理解もドップよりもはるかに高い。この違いは、多分にミークが『剰余価値学説史』を利用している点からきているのではないか。しかも、ドップのようにリカードの眼を通してのみスミスを見るという偏見からも解放されている。スミスの支配労働が「真実の尺度」論であることも指摘している。

そしてこの概念が「労働力が商品となった資本主義社会の、きわめてはっきりしたしるしを身につけている」(〔52〕 p. 65, 72頁)というのも適確である。しかし、羽鳥説に似て、そのことを直ちに「その商品のうりあげで雇いうる現在の労働量への関連」(同上)としてしまう。「価値の尺度は、その商品の生産の諸条件のなかにでなく、むしろ交換の諸条件のなかに、もとめるべき」(p. 63, 70頁)、というのもそのためである。スミスの労働＝価値尺度論は、たんに交換上の概念と解すのでは不充分である。また「資本家にとって、『労働』がその商品の価値の『真実の尺度』だと思われても、とうぜんなのである」(p. 66, 74頁)という考えも、そこから出てくる。スミスの、労働は「いついかなるときも労働者にとって」同じ価値をもつ、という言葉とどう整合するのであろうか。

他方、ミークは尺度としての支配労働という概念が、「資本主義下の蓄積の……かれの関心」を「起源」にするものにすぎず、それが「一般的な形態で表現されている。……かれの議論が、本質的に基礎概念をこのように一般化するところみからなってい

ることを評価しなければ、かれの価値論はただしく理解されてない」(p. 67, 75頁)とも述べている。しかし、「一般的な形態で表現され」たとき、「購買し支配しうる労働量」あるいは「労働の価値」がどういう意味をもつのかは捉えていない。それができないのは、基本的には、ドップ同様に、労働＝本源的購買貨幣説への配慮が全く欠けていることにある、とみてもよいであろう。「おおくの注釈者がやったように、スミスが『支配労働』尺度を、体化労働という規制者の代用品たらしめようとしたのだと、提案するのは正確ではない……いまは自然価格の構成要素が、支配しうる労働の量を規制することだけである。『支配労働』尺度は、あきらかにむかしもいまも適用されうることを意図していた」(p. 72～3, 81頁)という指摘も正しいが、それ以上進んでいない。「価値決定の問題への効用と需要の側からの接近……を、かれが『国富論』の一般的視点にとってはまったく無縁のものとなしただろうということは、いくら強調してもしすぎることはない」(83頁)という指摘も正しいが、しかしそれを「費用理論として、価値論史における位置」(p. 77, 89頁)とみるのは、正しくない。

II スミスにとっての労働生産過程

スミスは、次の第6章で「資本蓄積と土地占有」の発生後の、つまり資本家、賃労働者、土地所有者を登場させた、社会での価値論の考察に入る。マルクスは、これまで論じた第5章と第6(7・8章)との関係を、つぎのように考えた。「A・スミスの偉大な功績は、彼がまさしく……単純な商品交換とその価値法則から、対象化された労働と生きた労働とのあいだの交換に、資本と賃労働とのあいだの交換に……要するに剰余価値の源泉に移るさいに、ここに一つの裂け目の現われることを感知している」(〔6〕I 73～4頁)といっている。「裂け目」とは、資本家と賃労働の間では不等労働量交換がおこなわれて「価値法則が結果において事実上廃棄される」事態をさしている。彼の労働価値説がほんとうに「廃棄される」かどうか、後のIIIで検討するが、その前にそのような「裂け目」をスミスが「感知」しているかどうか、が問

題になる。マルクスは、ここでは明かに、商品論で等価交換の法則を論証し、「貨幣の資本への転化」で労働力商品を登場させて、資本の生産過程でその価値法則を維持する、という彼じしんの価値論を投影させてスミスを見ている。彼の第5章＝単純商品社会説もここからきている。

しかし、以上みたように第5章がスミスなりの価値形成過程（それは同時に労働生産過程でもあった）とすれば、第6章は、スミスなりの価値増殖過程とみることが可能である。そうすると、どちらも事実上資本の生産過程を対象としており、第5章と第6章との間には「裂け目」は、スミスにとっては、むしろ存在しないことになる。分業化の発展の極北に資本主義社会をみるスミスにとっては、原始的蓄積が抜けてしまい、小商品生産と資本家的商品生産とのあいだに「裂け目」がない、というだけではなく、価値形成過程と増殖過程の関係は抽象規定と具体規定の関係であり、「裂け目」は本来ありえないことになる。

しかし、スミスは第6章冒頭で小商品生産者の登場する「初期未開の社会状態」を新ためて設定したうえで、資本主義社会の価値論に入っている。とすれば、なぜこのような二重の社会像を設定したのか、「初期未開の状態」と第5章の関係はどう解すべきか、そもそもこのよう「状態」をなぜ設定する必要があるのか、ということが問題になってくる。『国富論』における剰余価値の問題に入る前に、この点について考えておく必要がある⁽⁹⁾。

1 「社会の初期未開の状態」

小商品生産と資本家的商品生産、独立生産者と資本家あるいは独立生産者と賃労働者とのあいだに量的な相違しか見ないスミスにあって、決定的な区別は、労働者が生産物を全部自分のものとするか、その一部分だけか、という点にあった。スミスが事実上資本主義社会における剰余価値の生産（正確にはスミスには利潤と地代

のための生産という意識しかない）を論じるにあたって、まだ「資財 stock の蓄積と土地の占有との双方に先行する社会の初期未開の状態」を設定することになったのもこのためであろう。

ここにおいてスミスは「さまざまな物を獲得するために必要な労働量の割合は、これらの物をたがいに交換するためのある定規 rule になりうる唯一の事情であったように思われる」と述べ、有名な1頭のビーバーと2頭の鹿の小生産者間での等労働量交換の例をあげている。ここでも生産に必要な労働量が商品の価値を決定する、とか商品価値として対象化される（あるいは含まれる embody）、という意味での投下労働価値説を明言しているわけではないが、投下労働量が交換比率を規定する「唯一の事情」と明言しており、それなりの投下労働価値説といてよい。ここが明快であるために、これまでこの部分は難解な第5章の要約のように解されることが多かった。ここから「初期未開の状態」＝投下労働価値説＝第5章＝「商業社会」という解釈が支配的となった。さきに見た小林昇氏の「商業社会」論もここからきている。マルクスの理解もそうであった。リカードもそう解して、スミスが「初期未開の社会」に限定した投下労働価値説を資本主義社会内で主張することが、『国富論』批判の眼目となった。しかしこの解釈では、これまで見たように第5章の主題である労働＝価値尺度論が無視される、そこで触れられている資本・賃労働関係が切捨てられる、あるいは、「商業社会」＝「初期未開の状態」になってしまう、等の難点を噴出させることになった。「初期未開の状態」を第5章の要約と解するのは、問題があるのである。

この点をわれわれは次のように解してみたい。第5章について力説したように、そこでの「労働の価値」は、リカードやマルクスが解したように単純に賃銀を意味するものではなかった。資本の生産過程において支出労働が価値形成す

(9) この点については、時永氏（〔23〕第2部のⅡ）と平林千牧氏（〔38〕の(4)）を参照。この点についても長島伸一氏は鋭い指摘をしている。5章と6章との関係は『資本論』の「労働過程」と「価値増殖過程」に「なぞらえることができる」（〔48〕15頁）という。スミスにとって労働過程と

価値形成過程が一体化していたから、そのようにも言える。しかしわれわれは後者の面が強く出ていると考えている。つまり、『資本論』になぞらえて言えば、第1～4章は「商品と貨幣」と「労働過程」を混和したものと見ることができるとはできない。

る関係が、スミスにとっては、自然に対して支払われる労働自身が価値をもち、それと交換に自然から得られる生産物商品が価値をもち、と考えられ、そのような意味で「労働の価値」が使われていた。「購買し支配しうる労働」量で尺度する、という考えや、「労働の価値」という言葉は、スミスが資本主義社会での労働（力）商品の売買、ないし「労働の価値」＝賃銀という現実を「目前」にしなければ、発生しえない表象ではあるが、この事実関係それ自体ではなく、それから抽象化された「労働の価値」をスミスは構想していた。スミスの労働＝価値尺度論を、単純に賃銀による価値尺度論（あるいは決定論）と解したリカードやマルクスは、スミスのこの深い構想を捉えそこなっているのだった。

スミスも現実の「労働の価値」が賃銀であることは知っている。むしろそれを前提にして、第5章で「労働の価値」の抽象的規定を展開し、第6章でその現実規定を論じようとしたのではないだろうか。スミスにとって「社会の進歩した状態 improved state」での現実とは、労働者は生産物を資本家と地主とで割け合わねばならず、賃銀（「労働の価値」）は、もはや全生産物の一部分でしかない、という点であった。そこで現実の「労働の価値」論の展開にあたって、「労働の価値」が全生産物であった想定される「初期未開の状態」を設定することになったのではないだろうか¹⁰⁾。

この推理は、第8章賃銀論の冒頭で、「労働の生産物は、労働の自然的報酬または自然的賃銀 natural wage をなす」（〔1〕(1)219頁p.82) といって、再び「土地の占有と蓄積に先行する」「初期未開の状態」——しかし今度は「事物の本来の状態 original state of things」と呼んでいる——をくり返している点と第2版でスミスが第6章で「未開の状態」の説明のさい「労働の全生産物は労働者に属し」という文を、また資本と土地所有発生後について「労働の全生

産物は必ずしもつねに労働者に属さない。かれはたいていのばあい、かれを使用する資財の所有者とともにそれを分けあわねばならない」という文を、追加した（同様のことが賃銀論でもなされている）点、の二つも支えとなる。ここではスミスにとっての関心は、抽象的な「労働の価値」＝「自然的賃銀」（全生産物）と現実の資本主義的賃銀（生産物の一部）という対照にあるように見える。

もしそうだとすると新たな問題が生じてくる。「購買も支配しうる」労働による価値尺度にし、労働＝本源的購買貨幣にし、それにもとづく「労働の価値」にし、資本の生産過程での価値形成のスミスなりの反映であり、スミス自身もそこから発想を得ているに違いない。けっして「社会の未開状態」から得たのではない。ところが現実の「労働の価値」＝資本主義的賃銀を展開する段になると、その前提となる抽象的な「労働の価値」は労働者が労働生産物全部を「自然的賃銀」として取得する関係として表象されることになっている。ここにはスミスの混乱があるように感じられる。「あらんかぎりの苦心をしたところでそれ自体の性質がはなはだしく抽象的な問題については、なおある程度のあいまいさが残る」（前出）という価値論についてのスミスの注意は、われわれにはこの点にも妥当する感じがする。

しかしこの点についてもスミスには必ずしも矛盾ないし混乱があると明確に意識されない理由がある。スミスにとってはもともと生産一般と商品生産とは同一視されている。また労働＝価値尺度論の考えを実質的に資本の生産過程を対象に得てきているとしても、資本主義社会はただ分業化の発展の極点として認識されているだけであって、マルクスのように小商品生産の分解・解消の結果できた社会として認識されているわけではなかった。「労働の価値」にし、労働＝本源的貨幣ないし労働＝本源的商品説に

10) この点が高島善哉氏のいうスミスの「経験的自然法」——実体概念を全く否定した経験一元論でもないし、経験を無視した形而上学的な自然法でもない（〔9〕159頁）——をみることもできるかもしれない。スミスにとっては抽象

的規定も現実的である必要があった。われわれが価値法則は、リカードにとっては自然法則的であるが、スミスにとっては自然法的である、といった〔49〕のも、これと関連している。

しろ、資本の生産過程からの表象でありながら、スミスにとっては、それらは資本の生産過程を捨象されて、小商品生産でも、分業もない状態でも存在しうるものとして抽象可能であった⁽¹⁾。資本家はいなくともスミスにとっては賃銀(「自然的賃銀」)や、労働商品や「労働の価値」は存在しうるものになっている。「あらゆる人が自分自身の労働という形で所有している財産こそ、他のいっさいの財産の本源的基礎」(〔1〕(1)337頁)という考えもここから成立する。

したがって資本の生産過程から得た表象であっても、小生産者からなる社会にそれが移されてもスミスにとっては不自然には(少なくとも矛盾とは)感じられない理由がある。だからもしかするとスミスは第6章で資本主義社会での賃銀、利潤、地代を考察し始めるにさいして、第5章をもう一度要約しようとしたのかもしれない。しかし、書かれた内容はもはや実質的に別のものとなっており要約とはいえないものになっている。もしスミスが第5章の冒頭で「初期未開の状態」に言及するのであれば、要約といえる。しかしそれをやると第5章の内容とそぐわない、という感じはもっていたのではないだろうか。

ともかく資本主義での賃銀の特質を自分の生産物の一部分でしかない点にみるスミスにとっては、第5章からこの問題に移るにさいして、生産物が全部自分のもの(「自然的賃銀」)であ

る関係を「初期未開の状態」として論理的前提にする必要があった。小林昇氏がいうように「『初期未開の社会状態』とは人類史の野蛮時代のことでなく、啓蒙主義的な概念形成の常奪を示す一例」(〔14〕Ⅱ28頁)といっていようが、「啓蒙主義的な概念」は『国富論』にあってはこのようにして必然化することになったのではないだろうか。資本家・賃労働者が捨象され、労働者が自分の生産物を相互に交換するのだから単純商品生産社会とみても差しつかえない面があるが、後世『資本論』の価値論の解釈から生じた単純商品生産社会と同じものといっていようかどうかは問題があるだろう⁽²⁾。というのは、スミスの「初期未開の状態」には、抽象的な商品生産という面だけではなくて、社会一般的な生産という面ももっていると見られるからである。

はっきり言えるのは、スミスは「初期未開の状態」という限定をもうけることによって、第5章よりも一層投下労働価値説に接近しえたことである。それは資本主義から離れるのだから、リカードやマルクスとは反対の方向においてであった。『経済学批判』でのマルクスのスミス批判——スミスは労働価値説を「アダム以前」,「失樂園」へ「押しもどした」——が妥当するものこの点においてである。価値論が発展するためには、まずリカードによる批判がどうしても必要であった。また、それだけにリカー

(1) 実際、第2編の冒頭では、「未開状態の社会」は、「分業というものが全然なく、交換もめったにおこなわれず、あらゆる人が独力であらゆる物を調達している」(〔1〕(2)231頁)と描かれている。これと第6章冒頭のそれとが、全く同一とは必ずしも言えないであろう。

(2) 「初期未開の状態」=単純商品社会説をとる羽鳥卓也氏は、スミスがそこにおいても「ある商品の獲得または生産にふつう費やれる労働の量は、その商品がふつう購買し、支配し、または交換されるべき労働の量を規定しうる唯一の事情である」と、やはり「購買し支配しうる労働量」を主張するのに会って、当惑しているように感じられる。それは労働力商品の売買を念頭においた「商品による<労働>の直接的な購買ないし支配を意味する」というのが、第5章=資本主義社会説の論拠であったからである。「単純商品生産社会では商品による<労働>の直接的購買ないし支配ということはいえぬはずである」。それではなぜか。「スミスはこの単純商品生産社会における物質代謝

過程を描写する段になると、資本制的関係を体现する概念や範疇をそこへ逆輸入して説明するという倒錯の結果に陥った」からであるという。そして労働=本源的購買貨幣説を引用している。

「物質代謝の過程」や労働=本源的購買貨幣説は、資本家的商品生産の中でとらえられてこそ意味がある。実際、スミスはそれを第5章で語っていた。だから、本源的購買貨幣説を「初期未開の状態」へ「逆輸入」して「単純商品生産社会における物質代謝の過程」を「説明する」やり方こそ、「倒錯的」といえるのではないだろうか。

氏は、結局、「スミスのばあいには、労働力が商品化されている資本主義社会で富が<労働>を支配・購買しているのと同様に、非資本制的社会の富もまた<労働>を支配・購買するものとして描かれる」(以上〔16〕46~7頁)とされる。とすると最初には返って、第5章の支配労働量は、必ずしも資本主義社会での労働の「直接的購買」とはいえない、ということになってしまわないだろうか。

ドのスミス理解は、すでに指摘したように一面的となり、その全体像を捉えないのだった。ここでもスミスは、商品の生産に必要な労働量が商品の価値をなし、その他商品による相対的關係（「交換割合」）が交換価値をなす、と明確には言っていない点に注意しておく必要がある。あくまでも投下労働価値説への接近に止まると考えるべきであろう。

2 「初期未開の状態」の他の一面

それが資本蓄積と土地所有の発生以前の商品生産と解されうるかぎり、小商品生産者の社会とみられるのには理由がある。しかし、そう解しただけでは不十分であり、これまで見落されてきた他の重要な一面を指摘しておきたい。

スミスは、人間と自然との労働を介する物質代謝の過程を、労働者が自然に労働を支払って、自然から生産物を買う、という関係で認識していた。これが、スミスが資本の生産過程ないし賃労働を対象とし、その価値形成過程の側面を、スミスなりに捉えようとしたものであることは、すでに指摘した。このことは他面では、スミスが社会一般的な物質代謝、つまり労働生産過程を、労働を支払って生産物を買うという形で商品交換視することを通して、それなりに把握していたことを示している。その意味では、『国富論』は、あらゆる社会の存立基礎をなす労働生産過程の原理的認識の最初という意義を秘めている。

しかし、それは価値形成過程と労働生産過程との同一視によってなされた。冒頭に分業概念には、社会一般的分業と商品生産特有のそれとが一体化している。「あらゆる国民の年々労働は、その国民が年々に消費するいっさいの必需品および便益品を本源的に供給する fund である」というとき、どの社会にあっても富とは「必需品および便益品」——労働労働生産物（＝使用価値）——であり労働によって供給される、という意味と、資本主義社会にあっても富とは商品としての「生活必需品および便益品」であり、その価値の fund は労働である、という意味とが重なっている。このかぎりでは、第5章はス

ミスにとっての価値形成過程であるとともに、スミスにとっての労働生産過程とみることもできる。もともと両者は社会一般的なものと特殊歴史的なものであり、明確に区別されてこそ正確に規定されうるものである。このように最初から無意識に一体化されては両規定とも不充分にならざるをえない。だがこのような不備を宿命づけられているとはいっても、スミスの労働＝本源的購買貨幣説には、労働生産過程の史上最初の認識という功績が含まれている。

この認識は、リカードでは消失してしまい、『資本論』第1巻の「労働過程」まで再興されることなく（ただしマルクスは労働＝本源的購買貨幣説の中に自己の先駆を読みとることができなかった）、しかも『資本論』以降再び失われ、宇野『原論』の「労働＝生産過程」まで見失われたものだけに貴重である。スミスの労働＝本源的購買貨幣説の中にこの面を読み取り、スミス価値論の理解に新局面を拓いたのは時永淑氏（〔21〕と〔22〕）である。

この面からみると、第5章の「世界のいっさいの富が本源的に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであった」、「労働は最初の価格」という言葉の中には、たんに資本主義的富（商品価値）の実体の認識だけでなく、あらゆる社会において富は労働によって生みだされるものであり、その社会的評価は労働量を基準にする、という認識も含まれていることになる。労働＝不変の価値尺度説もこの面があったからこそ主張されえたのではないか。この意味では、第6章冒頭の「初期未開の状態」は、第5章で含まれていた価値形成過程論と労働生産過程論の両面のうちの後者が、「資財の蓄積と土地占有に先行する」という時期限定によって新たに設定しなおされたもの、と見ることもできる。つまり資本主義社会の価値法則を、「アダム・以前」にスミスが設定したという意味と同時に、あらゆる社会の物質代謝の原則を吐露しようとした一面も含まれているのではないだろうか。スミスはあくまでも交換の割合の rule を論じているから商品生産特有の問題だ

けを論じているとは必ずしも言えない。スミスにとって商品交換自体が人間の本来の性向からきた社会一般的なものと考えられているからである。この意味では、マルクスの『経済学批判』での言——価値法則を「アダム以前」「失樂園」に押しやった——は、スミスは資本の生産過程内で抽象的に把握しうる労働生産過程を、「アダム以前」「失樂園」に押しやった、と読みかえることもできる。どちらにせよスミスの啓蒙思想家的一面を示しているといつてよいだろう。

この「初期未開の状態」は、第8章貨銀論では「事物の本来の状態 original state of things」ともよばれている。「本源的購買貨幣」の「本源的」も original である。(「労働こそ最初の価格」の「最初」は first であるが同義と見れる)。それらによって、スミスが同じものを考えていたと推定できるのではないだろうか。その同じものとは、スミスがどれだけ明確に意識していたかどうかは解からないが、労働生産過程を指向していたのではないだろうか。

以上、われわれは、「初期未開の状態」は労働生産過程論であると主張しようとしているのではない。単純商品社会という一面の他に、この面が含まれているのであり、このかぎりでは単純商品社会とだけ見るのは、一面しか読み取っていないことになる。現代人からみれば両面の混同であり混在になるが、両者を一体として捉える点に『国富論』の特質がある。スミスが資本主義社会を「自然的社会」とよんだのには、このような意味があった。

しかも、この二面性は、『国富論』のどの部分にでもあるが、どの部分でも同じ比重で並行して存在しているというわけではない。すでに検討したように第5章では特殊社会的側面、つまり価値形成過程の方が前面に出ている。第6章は、「初期未開の状態」では社会一般的な側

面、つまり労働生産過程の側面が強まり、「資本蓄積と土地所有の発生後は、特殊社会的、つまり価値増殖過程が前面に出ている。第1章「分業について」と第2章「分業をひきおこす原理」では、社会一般的な側面が前面に出、第3章分業の広さ、と第4章貨幣の起源は、第1・2章の社会一般的な側面(労働生産過程)から第5章の価値形成過程的側面を導くための移行規定のような役割を与えられている。冒頭の富とファンドとしての労働の規定にも二面あるから、『国富論』は富一般(労働生産物)から開始しているとも、資本主義的富(商品価値)あるいは商品生産から開始しているともいえる。しかし、『国富論』体系全体からすれば、あるいは学史上の意義からすれば、前者がより積極的な規定とすべきではないか。つまり『国富論』は富一般(労働生産物)、生産一般(分業ないし生産力)から開始している側面を特質とすべきではないだろうか¹³⁾。

この点は、商品価値から出発するリカード『原理』と相違する点であり、また特殊形態規定を重視した商品論から出発する『資本論』とも相違している。

同じく不変の価値尺度といっても、リカードとスミスには大きな違いがあるのも、ここからくる。たんに尺度財が労働商品かそうでないかの違いの問題ではない。スミスの労働＝不変の価値尺度には、労働生産過程の認識が秘められているのである¹⁴⁾。

3 揚武雄氏の批判

以上論じたように、スミス価値論の理解にとって、労働＝本源的購買貨幣説——自然にたいして労働を支払い、自然から生産物を買う、という意味での——は、キーポイントといつてよいものであるが、このような考えに真向うから反対する説がある。揚武雄氏は次のようにいう。

¹³⁾ といつても、スミスにあっては商品生産と生産一般が一体化しているのであるが、このような変化を意識的につけたとは思われない。スミスがどれほど自覚していたか解からないが、『国富論』が結果的に原理論を指向することになっているかぎりでは、このような実定規定と形態規定との強弱の変化がつかざるをえなくなっているのではないだろう

うか。理論が捉えようとする対象が明確化するにつれ、対象自身が捉えようとする理論に捉える方法を次第に明確きりと与えることになってくるのである。

¹⁴⁾ 中村広治氏の「スミスの『不変の価値尺度』について」[27]は、示唆に豊み興味ある論文なので一節をもうけて検討してみたいのであるが、すでに予定の頁数を越えてい

「スミスが『労働』をもって支払うとか、購買するとか言っているのは、明らかに $W-W'$ 、もしくは $G-W$ の過程を分析して述べているのであって、決して労働過程について述べているのではない。そもそも古典経済学がブルジョア社会を自然なものとなししていたということは、論者が言われるように、それが人と人との関係（商品流通）を労働過程に還元したからではない（両者は異質なカテゴリーであるから、一般に混同しようもしようがないものであるが）」（〔26〕93頁）。氏は、『剰余価値学説史』のマルクスにならって、本源的購買貨幣説が登場する第5章を、スミスは「正しくも生産者をすべて商品所持者という資格に抽象して登場させて」（同94頁）いるところと解し、労働＝本源的購買貨幣説はスミスが「分析家の立場に立って（対象化された）労働と（対象化された）労働との交換としてとらえている」（同93頁）と解釈する。この点羽鳥説と正反対になっている。

スミスが小生産者間の生産物商品（対象化した労働）の交換を念頭においているとしたら、どうして「世界のいっさいの富が本源的に購買されたのは、金または銀によってでなくて、労働によってである」とか「労働こそは最初の価格」とか言えるだろうか。労働＝購買貨幣をとくに「本源的」と形容する理由が説明できるであろうか。スミスが「労働過程」——人間と自然とのあいだの物質代謝——を念頭においていると解さないかぎり、これらの文は理解できないだろう。結局、氏は「確かに商品は貨幣のものではないし、まして商品価値の内的尺度である労働（時間）そのものは商品でもないのだから、尺度としての労働をたとえとしても『最初の価格』とか『本源的購買貨幣』になぞ

らえることは、不正確な表現であるばかりか、それ自体として誤っている」と断じられる。

だがこのような批判は、間違っているからそのような言葉は使わない、というに等しい。マルクスの「労働の価値」の「価値は余計だ」という批判と同じである（実際、氏はこれに「適切」と賛意を示しておられる。86頁。この点でも、disutility 説によってこのマルクスの言に反対を表明する羽鳥氏と対照的である）。氏がこのように解釈してしまうのは、商品論で価値の実体は対象化した労働であり、価値の「内在的」尺度は労働である、と説くのは正しいという固定観念があるからである。これにもとづいてスミスの価値論を強引に解釈し、どうしてもこれに合わない部分は誤りといって排除されることになる。氏は一方で、「交換価値をの大きいさを規制する諸原理」の根本が商品に対象化された労働量であり、したがって交換価値の『真実の尺度』が労働であることを発見したスミス（76頁）、とかスミスが「正しくも投下労働価値説の見地に立って、対象化された労働量の大小によって交換価値の大きさは規制される、と述べる」（85頁）と、高く評価される。他方で、「…労働は、実際は商品として登場させられていない……交換価値の尺度財の要件は、それが商品であり、かつ不変の価値をもつということだったのだから、スミスの議論は、自ら自己の誤まれる問題提起を否定している……スミスは尺度財としては一定量の商品として穀物を選んでるにすぎない」（89頁）、という判断をされるのは、このためである。

toil and trouble の部分だけとっても、スミスが「対象化された労働量」が商品価値を規制すると主張している、という解釈が問題であ

るので今回は次の点を指摘するにとどめる。

さきに指摘した「本源的購買貨幣」や「本来の状態」の original がたんに「歴史起源的」なものでなく「歴史貫通的な労働過程」を意味していることを、氏は鋭く指摘している（同10～11頁）。しかし、「労働の価値」を羽鳥氏と同じくたんに「負効用」としか解さないために、スミスの主張する「労働の価値」の不変性が、たんに「平均的労働者の一定量の労働の負効用は、いつでも・どこでも」一定（同13頁）という意味にしか解されない。そのために、ここで

の「いつでも・どこでも」の中にも、価値形成の基礎をなす社会一般的な「労働過程」の感知が含まれている点を見落している。original での鋭い洞察が、「労働の価値」の不変性では生かされていない。「労働の負効用」が直接の原因であるが、社会一般的な労働生産過程を、「歴史貫通的」——内田義彦氏の愛好される言葉であるが——と呼ぶ考え方にも遠因があるかもしれない。もっとも後者は原理論の問題であって、スミスとは直接関係はないが。

ることは、すでに指摘した。スミスが「正しく投下労働価値説の見地に立っている」とか「正しく交換価値の源泉を発見している労働＝「本源的購買貨幣説」(93頁)とか、いう解釈は一面的である。それは自説をスミスの中に無理やり読み取ろうとしているにすぎない。「超越的批判」の一典型といってよい。「不正確な表現であるばかりか、それ自体として誤っている」のは、スミスではなくて氏の解釈の方ではないだろうか。すでにのべたように、スミスはけっして、直接、投下労働＝価値源泉＝「内在的尺度」という説をとっていない(支配労働＝価値尺度説のうち結果的にそれを含蓄することになっている)のであるから、それを読もうとすれば、牽強付会に墮いらざるをえなくなる。

すでにこの揚論文にたいしては小黒佐和子氏がすぐれた批判をしている([28])ので、重複を避けるが、氏の依拠されている商品論での投下労働価値説＝内在的価値尺度説に、根本問題があるだろう。戦後の日本での価値形態論の研究の発展は、価値実体論を商品論で説く方法の問題点や価値形態論(価値表現)と価値尺度論(価値の実現)との相違を明らかにしており、価値の実体規定を内在的価値尺度と解することが問題があることを明らかにしている。氏のスミス価値論批判では、これが生かされていないのである。氏が戦後日本で評価の高まったスミスの労働＝本源的購買貨幣説にたいして全面的に批判されるとき自信は、マルクスがこれに言及していないことにあるように見受けられるが、それはスミスを論じたマルクスじしんの価値論がまだ問題を残していたことを示していないだろうか。むしろ、労働＝本源的購買貨幣説の中に、スミスなりの労働生産過程の認識をみる解釈の方が、『資本論』でのマルクスの価値論における「労働過程」の画期的な意義に照明を与えることにもなっているのではないだろうか。

氏のように、小商品生産で労働＝本源的購買貨幣説を考えるかぎり、生産と商品交換は外部的な関係にしかなく、「両者は異質なカテゴリー

であるから、一般に混同しようにもしようがない」と言って済ますこともできよう。だが資本の生産過程になると、生産物は生まれながらに価値をもった商品(資本家社会的富)として現われ、スミスはこの過程を自然に労働という貨幣ないし商品を支払い生産物を買う、という形で理解したのであり、生産過程の商品交換過程視はむしろ自然ではないだろうか。ここでは「異質なカテゴリー」の一体化が必至であり、「混同」されることになる。「それ自体は誤まり」であっても、この誤りをおかしたところこそが、スミスがはじめて資本家社会的富を捉え価値形成過程と労働生産過程の問題を感知していたことを示している。そこにスミスの偉大さがあるのである。

スミスが分業と商品生産を同一視し、資本主義社を社会一般(「自然なもの」と解した根源はここにある。氏のいうように「商品流通W—G—Wなる運動形態をとる現実の交換価値が、社会関係を表現する価値の現象形態である」ということを展開、論証できなかつたために、商品流通を事実上商品(財)と商品(財)との交換として把握することになり、その結果商品(流通)の特殊歴史的な性格を理論上論証できなかつた」(94頁)ということから、それは説明できるだろうか。スミスは商品流通を流通手段としての貨幣を通して一般的に理解しており、「財と財との交換」という考え方はしていない。また、生産過程を交換ないし売買過程視したからこそ、「商品(流通)の特殊歴史的な性格を理論上論証できなかつた」のであり、この逆ではないだろう。

批判の対象とされている『価値論』の宇野弘蔵の言——「自然にたいして働きかける人間が労働を自然に支払って生産物をその代価として受けとるとするのは、商品経済を永久不変とするものである」([19]第3巻273頁)——もこの意味であろう。なぜスミスが商品交換を人間本能とまで考え、商品生産を分業一般と見、資本主義を社会一般とみたかは、これによらないでは説明不可能である。注意しないといけないの

は、宇野は資本の生産過程内での労働過程を念頭において、労働＝本源的購買貨幣説を批評している、という点である。揚氏は単純商品社会ないし小商品生産においてそれを論じていると思われる他の諸説と一緒にして批判しているが、適当ではない。同じく労働＝本源的購買貨幣説をとる場合にも、論者によってその理解内容には違いがある。

商品価値の実体をなす労働は、「どんな社会形態にも共通に行われる労働生産過程、すなわち自然と人間との間の物質代謝過程における」労働である、と考える時永氏（これは宇野をはじめ宇野派と呼ばれている人々が共通してとる考えである）にたいして、揚氏は「スミスならぬ批判者自身が、投下労働価値説を（交換）価値に関するものでなく、富一般に関するものと把握している」（96頁）と批判されている。価値の実体をなす労働が社会一般的なものであれば、価値法則そのものが社会一般的なものになってしまう、という考えは、現在の日本だけでなく西欧においても広くみられる常識であって揚氏はその一例にすぎない。もしそうならマルクスも「抽象的人間労働」を社会一般的なものと考えていると思われる（少くともその一面はある）が、マルクスにたいしても氏は同じ批判をされるだろうか。スミスの場合は価値の実体をなす労働を社会一般的なものと認識することは、資本主義社会を社会一般的なものと考えることに結びついた。だから、そのような考え方は、実はスミス段階への後退なのである。価値の実体を基礎づける「労働生産過程」の社会一般性をスミス以上に明確化した『資本論』が、なぜ資本主義社会の特殊歴史性をはじめて論証しうることになったのだろうか。価値の実体をなす労働を特殊社会的と考えることによって、スミスの段階を超えることができると信じるのは、安易である¹⁵⁾。

「価値概念を与えることなく価値形態論は展開しうるし、またせねばならないとする宇野弘

蔵氏の見解は、全く誤ったもの」（80頁）という批判——これも広く見られる——も見当はずれである。価値の実体規定を与えることなしに展開しうるという宇野の主張を、価値概念なしに展開しうる、と解している。そう誤読してしまうのは、商品論での価値実体論のみが正しいとする氏の固定観念のためである。これも「不正確な表現であるばかりか、それ自体として誤っている」と言ざわをるえない。われわれは、けっしてこれまでの労働＝本源的購買説の理解に問題がなかったというのではないが、氏の批判は、スミスにたいしてと同様に、時永氏や宇野にたいしても、誤解にもとづく非難と言わざるをえないだろう。

4 時永説の検討

向坂逸郎・宇野弘蔵編『資本論研究』は、戦後日本の価値論研究が解釈論の域を脱し欧米の研究水準を追い抜いてゆくさきがけとなったことを印した、記念すべき研究会の記録である。その特徴の一つは時永淑氏が書いているように『資本論』、とくにその価値論の研究を「今一度古典派経済学への批判に立ち帰って再検討しようとしている」（〔22〕68頁）点にある。すでにここでスミスの *toil and trouble* 論、労働＝本源的購買貨幣説、「労働貨幣」説、等への鋭い視点が展開されている。この討論の中から久留間の『経済学史』や宇野の『価値論』が生れることになったばかりでなく、商品論を商品形態論とし、価値の実体規定は資本の生産過程で説く方法で特徴づけられる宇野『原論』が生れることになった。時永氏が指摘しているように、この方法の明確化の過程で、宇野の労働＝本源的購買貨幣説にたいする理解が重要な役割をはたしている。そのさい宇野にあっては、スミスは社会一般的な労働過程——商品交換とは異なる人間の自然にたいする関係——を商品交換過程視することによって、商品経済ないし資本主義社会を自然なもの、永久不変なものとして認識する

15) 他稿で論じるように、実は初期マルクスの考えがこれであった。これでは古典経済学を否定するという意味での批判はできるが、その中に埋もれた肯定面を発掘し発展させ

るという意味での批判はできない。1850年以降マルクスが、ロンドンに移って古典経済学研究を全面的にやり直さざるをえなくなる一因もここにあったに違いない。

ことになっている、という側面に力点がかかっている。これによって、一方では商品・貨幣・資本の特殊形態規定性の強調（流通形態論）、他方では労働過程の社会一般性の強調（「労働＝生産過程」）、へと発展していった。宇野にとってそれは「商品による商品の生産」として現われる資本の生産過程上の問題であって、たんなる商品流通と生産過程との同一視ないし解消にあったのではない、ことはすでに述べた。これにたいして、時永氏はこの成果を基礎にしたうえで、労働＝貨幣支払による交換過程をとおして、たとえ不完全であれスミスが事実上、労働生産過程を対象にした点を明かにした。これがどんなに重大な発見であるかは、マルクスが価値の実体としての労働の発見の先駆が『国富論』であることを充分知っていたのに、『資本論』の「労働過程」の先駆が『国富論』にあることにまだ気づかなかったこと、宇野がスミスでの労働過程の商品交換過程視を問題にすること自体スミスが労働過程をそれなりに感知していた意味を含むとはいえ、宇野ではまだ商品経済への解消に重点がかかったままであったことを見ればわかるであろう。これは『国富論』の重要な面を捉えたことになる。これによって「アダム・スミスの価値論の意義と限界」(〔20〕)から出発した氏の学史研究に新局面がひらけることになったように思われる¹⁴⁾。『経済学史』がその結実とみてよいであろう。われわれの研究もこの書に多くを負うのであるが、さらに価値論史を前進させるために、スミス価値論の部分につき、疑問と思われる点をいくつかあげてみたい。

まず、①氏のばあいにも、第5章＝単純商品生産社会＝「初期末開の社会状態」という理解がみられる（〔21〕226～7頁）。②氏のばあいにも、スミスには投下労働価値説と支配労働価値説との二面性があるという通説的理解がある（同230～237頁）。もっとも氏の場合は、この二

面性が「分裂」しているというのではない。「両者はなんら矛盾する関係にはなく、ただ一方は対自然的なもの、他方は対社会的なものという違いをもつだけで、スミスなりには論理的に整合しうる」（233頁）と主張されている。しかし、われわれにとってはスミスが投下・支配の二説をとっている、という判断自体に問題があると思っている。

氏がそのような考えるのは、③労働＝本源的購買貨幣説をスミスの投下労働価値説と判断されている、点からくるように思う。この説は氏のいわれるように『労働』と『生活必需品および便益品』との交換過程としてつかまれている」（231頁）ことを意味している。このことは投下労働がつくりだす生産物が価値をもつ関係が、スミスにとっては、労働を支払われたから自然からそれと交換に得られる生産物が価値をもつ、としてしか認識されていない——直接、投下労働が価値を形成するとか決定するとは考えられていない——ことを意味している。貨幣と同じものとみられた労働が投下労働量と同じであるかぎり、実質的に投下労働価値説と同じような意味を含みうるとしても、スミス自身は直接、投下労働価値説として主張してはいないと考えるべきではないか。「等量の労働の価値を含むと考えられる物と交換する」も、ただちに投下労働価値説とみるべきでないこともすでに述べた。

氏のばあいこの投下労働価値説観から、両説の関係が「スミスのばあいは、自然と人間とのあいだに商品交換が行なわれるものとしてつかまれ、この理解からする彼の投下労働価値説が、商品所有者相互間の商品交換関係を対象とする支配労働価値説の基礎をなす」（233頁）という形で把握されている。スミスの労働＝価値尺度説は単純に商品の価値が投下労働量で決定されること基礎にして、尺度する関係と解すべきでないことは、すでに指摘したが、ここでの投下

14) この論文では、まだ戦後日本での原理論の成果が生かされていない。『剰余価値学説史』、『資本論』の理論をもってスミス価値論のすぐれた分析が、『草稿』、『講義』

等との比較をしながら「成立史的」に考察されている。それだけにスミス価値論研究の出発点として、久留間・玉野井『経済学史』とともに、今なお参考になる。

労働価値説基礎論にも問題があるのではないだろうか。ここから、④氏はスミスの支配労働価値説を、「どれだけ他人の労働生産物すなわち社会的労働の生産物を支配し購買しうるかは、自己の労働生産物に含まれている労働の量によって決定される」(223～4頁)ことと解しているが、スミスは支配労働を労働＝価値尺度論として提出しているのではないか。したがって、⑤「一方は、対自然関係のもとでの投下労働価値説、他方は、社会関係のもとでの支配労働価値説というような二面」(230頁)という考え方にも疑問を感じる。そのようなものであれば「両者はなんら矛盾する関係にはない」と言ってもよいが、スミスが支配労働価値説をそのような意味で述べているのかが問題になる。

総じて、氏にあっては第5章の主題が労働＝価値尺度論である(労働＝本源的購買貨幣説もその根拠づけの一つとして登場する)という認識が薄いのではないだろうか。「投下労働価値説を支配労働価値説をもって補足するという関係において説いている」(230頁)という判断にも示されているように、第5章に投下労働価値説を読もうという面が強い。『剰余価値学説史』のマルクスがそうであった。第5章＝単純商品生産社会説も同じである。このばあい「商品の価値は……その商品がその人に購買または支配させうる労働量に等しい」というときの「購買または支配させうる労働量」は、小生産者の生産では、生産物に対象化した労働量でしか考えられないことになる。投下労働量＝支配労働量と解され、価値尺度の問題が抜けてしまうことはすでに指摘した。時永氏の説はマルクス説と同じというのではないが、この面ではかなり強い影響下にあると言えるのではないだろうか。

スミスのいう「購買し支配しうる労働量」をすべて対象化した労働量に解消しようとするのは無理があるが、といってこれを資本家が購入する賃労働(労働力商品)と解するのも問題が

あることはすでに指摘した。価値尺度とされる労働は、「労働商品」には違いないのであるが、眼前の賃労働ないし労働力商品から抽象されたものであり、そのものではない。「抽象的観念」である。「労働の価値」も賃銀から発想されたに違いないが、賃銀そのものではないこともすでに指摘した。第5章は第6章資本主義社会からの抽象規定であることは確かであるが、それは単純商品社会ではなく、むしろ価値増殖過程から抽象された価値形成過程に相当する、と考えるべきことも指摘した。

⑥スミスが労働＝本源的購買貨幣説によって事実上、労働生産過程を対象にした、という点は重要であるが、スミスが事実上対象にしたのは、むしろ価値形成過程であり、それを介して同時に労働生産過程をも事実上対象にしえた、と理解すべきではないだろうか。スミスが労働＝貨幣を支払い生産物を買うという形でとらえているのは、小商品生産者の生産でもなければ、直接生産者の生産でもなく、事実上資本の生産過程ではないだろうか。その価値形成的側面を感知しているからこそ、商品交換視もできたのである。もっとも、このことはスミスが価値形成過程を認識していたということではない。その意味では形態規定と実体規定の明確な区別のないスミスにあっては、本来の労働生産過程の認識もなければ、本来の価値形成過程の認識もない¹⁷⁾。しかし、価値形成過程に触れてこなければ(感知しなければ)、けっして労働過程の商品交換視も、労働＝本源的購買貨幣説も労働＝価値尺度論も出てきえない。そのかぎりでも無意識のうちに事実上それを論じているという意味なのである。われわれがスミスの価値形成過程論と呼ばずに、スミスにとっての価値形成過程論、あるいはスミスにとっての労働生産過程論と呼ぶのはこのためである。

「スミスの第5章の次元では、当然、労働生産過程そのものは、たとえ事実上対象にされて

17) 時永氏は「大体古典経済学には本来のいみの価値実体論はない」という鎌倉孝夫氏にたいして、一面ではそれを認めつつ、そればかりを強調しすぎると、スミスが……労働生産過程そのものを、対象にしていたこと自体まで否定さ

れかねない」(〔22〕78頁)と批判されているが、これに賛成しうる。しかし、それを「単純商品生産的に把握した」という点には賛成できない面がある。

いたにはしても、宇野氏のいうように、それが『資本の生産過程として、一定の特殊な社会関係のもとに商品形態を通じて行なわれる』ということは、事実的にも、理論的にも、スミスの眼には映っていないし、またそのように説かれてもいない」〔22〕85頁）と氏は言われている。商品交換が「特殊な社会関係」という認識がなく、剰余価値ないし利潤が剰余労働の搾取であるという認識のないスミスが、そういう意味での「資本の生産過程」を対象にしていないのは確かである。しかし、労働支出を貨幣（一般的等価物）支払視してまでも生産過程を商品交換過程視したということは、スミスの眼には価値形成過程がそのように映ったことを示しており、その意味では、スミスなりに資本の生産過程を事実上対象にしている、と考えるべきではないであろうか。労働生産過程は社会一般的なものとはいっても、マルクスがそうであったように、資本家的生産過程の中でのみ抽象されるものである。これと離れた捉えられたたんなる生産過程は、実は原理的意味での労働生産過程ではありえない。スミスの事実上の労働生産過程の把握も、事実上資本の生産過程を対象にし、その価値形成過程としての側面をスミスなりに感知したからこそ可能になったのではないか。マルクスのいうスミスにおける「労働一般」の発見も、たんに商品交換＝労働交換という考えから得られたとは考えられない。そのような労働価値説ならずで触れたようにスミス以前にあったがそれでは、一社会を構成する資本社会的富を捉こうる労働価値説にはなりえなかった。

「直接的生産者は、自己の労働を『本源的購買貨幣』として自然に対して支払い、その代償として『すべての物』……を自然から受けとる」と表象されていても、その「直接的生産者」は

労働を商品ないし貨幣として所有していると考えられているのであり、それはもはやたんなる小商品生産者ではない。賃労働者から、価値形成過程を説明するために仮構されたものという性格をもっている。だからわれわれは第5章が単純商品社会的イメージを与える側面があることは否定しないが、スミスなりに価値形成過程を対象にしえているからこそそうなのではないだろうか。だからこそ「一面では単純な商品生産に基づく単純な商品交換というイメージをわれわれに与えることになり、他面では『資本的資財』が『生産的労働』を支配する関係として事実上商品の資本としての価値増殖の問題にかかわる側面をもつことになった」〔22〕82頁）、と言えるのではないだろうか。

ただし、そのような関係としての「事実上商品の資本としての価値増殖の問題にかかわる側面」は、第6章で展開され、第5章ではその基礎としての「事実上商品の資本としての価値形成の問題にかかわる側面」をもつ、という方がより正確であろう。このように考えてこそ『国富論』が事実上、労働生産過程を対象にしえている、という氏の重要な発見も生きてくるのではないだろうか¹⁹⁾。

さきにあげた向坂・宇野編『資本論研究』の中（『資本論』の価値尺度論に入った所）で、宇野は「クラシックの労働価値説が出てくる根拠と、クラシックの価値尺度を求めた方向……との間に何か一致したものがあるのじゃないか……生産物という商品形態が超歴史的にあって、労働で何時でも測られるという風な考え方、つまり生産物の商品形態は労働が価値形成するというのを逆にして労働でもってそれを何時でも測られるのだ、こういう考え方が含まれているのではないか、それが労働貨幣説に当然なってくるのじゃないか」〔18〕314頁）、と注目すべ

19) なお、時永氏は、「初期未開の社会状態」の第6章冒頭と第2編冒頭での相違について、「後者では、分業も交換もない自給自足の形で……とらえられており、前者では、その社会状態での交換が投下労働量を定規とする関係でとらえられている。この矛盾を、われわれにどう理解すべきであろうか」と問題にして、「第5章での考察の対象は、

自給自足的な社会状態のもとで、当初は偶然に行なわれたところの生産物の交換……の拡大を、ただ、その生産物が交換されるかぎりでもとりあげたもの」〔21〕228～9頁）と言われている。第5章＝「初期未開の状態」という考えに立っての考察であるが、第6章冒頭のそれに限ってみても、そのような統一性を求める考え方に疑問をもつ。「初

き発言をしている。この鋭い視点は、『価値論』を経て『経済原論』において、価値尺度論を価値表現とは区別される形態規定として純化し、労働の価値形成は資本の生産過程で展開する、という方法を生み出すことになり、原理論研究の中では宇野じしんによって生かされた。宇野の労働＝本源的購買貨幣説に関する発言は、時永氏によってスミス価値論の研究に生かされたのだが、この部分は、時永氏を例外として、スミス価値論の研究の中で注目されないままになってきたのは、学史研究にとって不幸ではなかったか。この部分を時永氏 ([22]67頁) と小黒氏 ([37]41頁) は論文で引用し注目しているのであるが、まだ十分に生かされているとはいえないのではないだろうか。本稿でのわれわれの考え方はわれわれ自身の価値論研究からきたもので、この宇野の発言からヒントを得たのではないが、以上のようなわれわれのスミス価値論の理解からすると、この宇野の発言は無視されてよいことにはならない。

5 鎌倉説の検討

鎌倉孝夫氏の『経済学説と現代』のなかの「スミスの価値論——『労働』と生産物の交換」([34]121～132頁)は、鋭い論点を数多く提出しているきわめてすぐれた論稿である。くわしく検討するに値いするのであるが、すでに予定の紙数を越えているので、要点だけを書いておこう。

スミスの労働価値説が労働＝本源的購買貨幣説によるものであることを、『『労働』が『本源的購買貨幣』だという理解は、商品経済が労働・生産過程をも包摂してきたというブルジョア

経済の発展を現実の基盤としている。金・銀貨幣を『富の資源』としてとらえるのではなく、『労働』を『資源』としてとらえること、そこに労働価値説成立の根拠があった」(122頁)、と適確に指摘している。ここには、さきの時永氏の批判——本来の労働生産過程論はないにしても、事実上それを対象にしている——が生かされ、さらに発展させられている。スミスの支配労働価値説が「マルサスによって純化された支配労働価値説……とはちがって、スミスの場合には、一商品と『労働』との交換を基本においていた。しかもその交換といっても、本質は『労働』による生産物の『生産』をとらえていた」(124頁)という指摘がそうである。ここから「スミスの支配労働価値説は、『労働』によって生産物を生産するという関係を……『労働』と生産物との交換ととらえ、今度はこれを生産物所有者の側から規定し、生産物と『労働』との交換＝生産物所有者がそれを労働者に交換に出し、労働者の一定の『労働量』を『購買または支配』するものととらえた」(125頁)、というすぐれた考察が示される。

さらに第5章が『資本論』の「単純な価値形成過程」に「対応するものと考えられる」(同112頁)というすぐれた洞察が示されている。しかし、第5章を「資本家が捨象されている次元」(126頁)と考えるために、他面では第5章を「単純商品生産の想定のおかげで説かれている」(111頁)という面を残している。第5章は利潤、したがって価値増殖の捨象された次元とみられるが、「資本家が捨象されている」と解すべきであろうか。そこでの商品は、小商品生

期末閉の状態」というのは、啓蒙主義的なものであり、必ずしも論理的なものではなく、便法的なものであるとすれば、そのときどきで微妙な差が出てしまう点に面白さがあるのではないだろうか。第4章では「社会の未開時代 *rude ages of society* には、家畜が商業の共通の用具であったといわれている」([1] 134頁 p. 38) という文も見出せる。

もう一つ。氏が追求されている「スミスとマルクスにおける二重の社会像」([23] 第2部Ⅱ) というテーマは、一重像であったリカードをはさみスミスとマルクスが価値論を二重に分けて論じているので、興味ある問題である。しかし、第5章＝単純商品社会説に立つかぎり問題が残るの

ではないだろうか。『資本論』の商品論——これも後の解釈で出てきたようなたんなる単純商品社会論と考えるのは危険であるが——がそこで価値の実体規定を与えた「想源」を「スミスの労働価値説に見いだす」([22] 49頁) 点もにわかに賛成しかねる点がある。マルクスがスミスの価値論を十分に批判しえたら、商品論での価値実体規定を彼じしん問題視することになっただろう、と言うことはできるが、スミスが「想源」となってそれが成立していると言えるかどうか(むしろ、マルクス自身の積極的な論拠があったのではないか)、今後マルクスの価値論の形成過程をみるさいに考えてみたい。

産物を部分的に含むとしても実質的には資本家の所有する資本の生産物を中心に考察することになっているのではない。

氏の支配労働価値説も、「商品価値は、それが支配ないし購買しうる労働量で決定される」（125頁）という考え方がある。スミスが「商品の価値は……その商品が購買または支配させる労働量に等しい」というのを、そのように解するのが一般的であるが、それでよいだろうか。スミスが第5章で価値決定の問題を考えようとしたのは確かである。第4章末で第5章の課題を「交換価値の真の尺度とはどのようなものであるか、すなわち、すべての商品の真の価格はどのようなものに存するか」といったのは、それをさしている。つまり、スミスは価値決定を、直接、投下労働によっても支配労働によって規定しているのではなくて、労働＝価値尺度をとおして成立するものと考えているのではないが。だから、第5章の主題は労働＝価値尺度論であるが、それはけっして価値決定ぬきの価値尺度論（価値表現としての）でもない。

鎌倉氏は、スミスの投下労働価値説がまだ本来のそれだけでなく、カッコつきのものであることを適確に指摘しているが、支配労働価値説については通説の批判がなされていない。それは、時永氏の場合と同じく、第5章のテーマが労働＝価値尺度論である点への認識が薄いためであろう。

時永氏ほど前面に出ていないが、やはり第5章＝単純商品社会説——そこでは投下労働量＝支配労働——をとっておられるために（「単純な労働生産過程」という言葉もそのためであろう）、第5章ですぐに「スミスの投下労働価値説は、商品の価値を『労働の価値』、すなわち労働賃金によって規定するものとなっていた」（123頁）、ということになるが、これでは「労働の価値」の不変性が賃銀の不変性になり、スミスが言わんとしていた労働生産過程の普遍性の側面が落

ちてしまわないだろうか。第5章では「労働の価値」は「抽象的な観念」であり、第6章になって具体的に賃銀の意味をもってくるべきではないか。

「この交換関係を、『労働』を交換に出す労働者の側からとらえれば、投下労働価値説が成立し、同じ交換関係を『生産物』の側からとらえれば支配労働価値説が成立する。同一事態の二面的把握である」（125頁）という捉え方では、スミスが「労働者の側から」投下労働価値説を直接主張したことになり「労働商品と生産物との交換」という間接的な独特の労働価値説を主張したという氏の捉え方と抵触しないだろうか。「初期未開の状態」でもスミスは支配労働に言及していること、第6章以降でもスミスはなぜ「労働者の側から」の主張を続けないのか、等も考慮する必要があるだろう。第5章で投下労働価値説を強く見すぎると、リカードがマルクスへのたんなる通過点になり評価が弱まらないだろうか。しかし労働＝価値尺度説への配慮が少い、という点が制約となっているとはいえ、労働＝本源的購買貨幣説にもとづくスミス価値論の解析が一層発展させられているのは確かである¹⁹。

（未完）

<後記> すでに紀要論文としては大きなものになってしまったので、Ⅲの部分はすでに書き上がっているが、次の機会に公表したい。

本稿作成にあたり、一橋大学経済研究所の資料を多く利用させていただいた。こういう機会を与えられなければ、本稿の作成は何年もあとになったであろう。同研究所ならびに高須賀義博教授に感謝したい。（1985.11.18）

参 考 文 献

- [1] Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776(本稿の引用は The Glasgow edition of the

¹⁹ われわれが戦後日本での原理論研究の成果というとき、必ずしも宇野弘蔵の成果と同義で使っているわけではない。氏の成果を基礎とするその後の展開も含んでいる。

われわれ自身の価値論について知りたい場合は、[49]を参照していただきたい。

- Works and Correspondence of Adam Smith II, 1976による)。原書のページはこれによる。和訳については、岩波文庫版『諸国民の富』の頁数を示す。Cannan 版 (6th edition, 1950, 2vols) のページはこれから見つけることができる。訳文は必ずしもすべてこれに従っているというわけではない。
- [2] Adam Smith, Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow, edited by Cannan 高島善哉・水田洋訳『アダム・スミス グラスゴウ大学講義』日本評論社1947年
- [3] David Ricardo, The Principles of Political Economy and Taxation, 1817 (本稿の引用は Sraffa 編 The Works and Correspondence of David Ricardo vol I および『リカード全集』第1巻, 雄松堂, による)。
- [4] Malthus, Definitions in Political Economy, 1827 玉野井芳郎訳『経済学における諸定義』岩波文庫
- [5] Karl Marx, Zur Kritik, 1859 『マルクス・エンゲルス全集』13巻
- [6] Karl Marx, Theorien des Mehrwerts, Marx-Engels Werke, Band 26. Teil I II III, 『マルクス・エンゲルス全集』26巻 I, II, III, 時永淑訳
- [7] Karl Marx, Das Kapital, vol. I, 『マルクス・エンゲルス全集』23巻 a
- [8] 高島善哉編『古典学派の成立』(『経済学全集』河出書房 第2巻)
- [9] 高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』岩波書店
- [10] 久留間敏造・玉野井芳郎『経済学史』岩波全書, 1954年
- [11] 内田義彦『経済学の生誕』未来社
- [12] 藤塚知義『アダム・スミス革命』東大出版会
- [13] 岡崎栄松『資本論研究序説』日本評論社
- [14] 小林昇『小林昇経済学史著作集』I, II 未来社
- [15] 羽鳥卓也「スミスにおける『価値の源泉』——『国富論』第2版の改訂箇所をめぐって——『三田学会雑誌』67巻6号
- [16] 羽鳥卓也「スミスの価値論と『初期未開の状態』」同上 67巻10号
- [17] 羽鳥卓也「小林昇教授と『国富論』研究」——『小林昇経済学史著作集をめぐって——岡山大学経済学会雑誌』13巻3号
- [18] 向坂逸郎・宇野弘蔵編『資本論研究』至誠堂
- [19] 宇野弘蔵『宇野弘蔵著作集』I, II, III, 岩波書店
- [20] 時永淑「アダム・スミス価値論の意義と限界」『経済志林』(1) 22巻3号 (2)同22巻4号
- [21] 時永淑『経済学史』法政大出版会
- [22] 時永淑「アダム・スミスの労働=本源的購買貨幣説に関する一考察」——久留間敏造, 宇野弘蔵両氏の所説(向坂・宇野『資本論研究』と宇野弘蔵『価値論』所収)を中心として——『経済志林』39巻1・2号
- [23] 時永淑『古典派経済学と資本論』法政大出版会
- [24] 和田重司『アダム・スミスの政治経済学』ミネルバ書房
- [25] 船越経三『アダム・スミスの世界』東洋経済
- [26] 揚武雄「アダム・スミスの価値尺度論についての一考察」——労働=本源的購買貨幣説の解釈にも関連して——『経済学雑誌』71巻5号
- [27] 中村広治「スミスの『不変の価値尺度』について」大分大『経済論集』28巻1号
- [28] 小黒佐和子「アダム・スミスの価値尺度論について」明治学院論叢『経済研究』53号
- [29] 大河内一男編『国富論研究』I, II, III, 筑摩書房
- [30] 水田洋『アダム・スミス研究』未来社
- [31] 大内力『経済学における古典と現代』東大出版会
- [32] 大内秀明『価値論の形成』東大出版会
- [33] 鎌倉孝夫『資本論体系の方法』日本評論社
- [34] 鎌倉孝夫『経済学説と現代』河出書房
- [35] 経済学史学会編『国富論体系の成立』岩波書店
- [36] 桜井毅『生産価格の理論』東大出版会
- [37] 桜井毅「スミス経済学の成立の基盤について」『武蔵大論集』29巻3—4号
- [38] 平林千牧「経済学体系の一考察」(1)(2)(3)(4)『経済志林』40巻3号, 41巻2号, 42巻1号, 43巻4号
- [39] 稲村勲「スミス価値論の論理構造について」関西大『経済論集』26巻2号
- [40] 稲村勲「アダム・スミスの経済原理論と『商業社会』」(1)——『国富論』第1編・第2編の世界——
- [41] 安田展敏「アダム・スミスの原理的世界の論理構造に関する一考察」『旭川大学紀要』第5号

- [42] 安田展敏「アダム・スミスの『剰余価値』論に関する一考察」(→『旭川大学紀要』)
- [43] 平林千牧編『経済学説史研究』時潮社
- [44] 渋谷正「A. スミスの資本主義社会像についての一考察」——「商業社会」をめぐる——東北大『経済学』41巻3号
- [45] 島博保「スミス価値論の構造」東北大『経済学』41巻4号
- [45] 水田健「アダム・スミス商業社会論の成立」法政大『論集』号
- [46] 武井邦夫「古典派経済学の労働価値説」——「労働の価値」をめぐる——『茨城大人文学部紀要(社会科学)』15号
- [47] 三輪春樹「アダム・スミスの価値論について」——スミスは労働価値説を放棄したか——筑波大『経済学論究』2号
- [48] 長島伸一「『国富論』における〈労働〉把握」——〈労働=本源的購買貨幣〉説をめぐる——『長野大学紀要』5巻3号
- [49] 永谷清『価値論の新地平』有斐閣
- [50] Dobb, Political Economy and Capitalism (revised) 1940 ドップ, 岡稔訳『政治経済学と資本主義』岩波書店
- [51] Dobb, Theories and Distribution since A. Smith, 1973 ドップ, 岸本重陳訳『価値と分配の理論』新評論
- [52] Meek, Studies in the Labour Theory of Value, 1956, 2nd edition ミーク, 水田, 宮本訳『労働価値論史研究』日本評論新社
- [53] ミーク, 時永訳『スミス, マルクスおよび現代』法政大出版会
- [54] シュムペーター, 東畑訳『経済分析の歴史』I 岩波書店
- [55] ブローグ『経済理論の歴史』(上) 東洋経済
- [56] ホランダー『アダム・スミスの経済学』東洋経済
- [57] スキナー『アダム・スミスの社会科学体系』未来社
- [58] 山本哲三「スミス価値論の生誕と帰趨」『評論』52号 日本経済評論社
- [59] 海老塚明「スミス価値論の再検討」——カルロ・ベネッティのスミス解釈——『一橋研究』9巻3号
- [60] 時永淑編著『古典派経済学研究』II, 雄松堂出版